

特114

484

吉野拾遺詳解

發行所 神保書店



始



特114

484

三
栖
瞑
想
士
著

吉
野
拾
遺
詳
解

發
行
所
神
保
書
店

特14
484



三栖瞑想士著

吉野
拾遺詳解

發行所
神保書店

大正
14. 9. 26
内交

吉野拾遺詳解目次

| | |
|------------------|---|
| 一、主上吉野の宮にて御歌の事 | 一 |
| 二、天女の歌の事 | 二 |
| 三、稻荷明神臨幸の道を照し給ふ事 | 四 |
| 四、吉水法師歌の事 | 五 |
| 五、勾當内侍歌の事 | 六 |
| 六、内侍妹の方に返歌の事 | 八 |
| 七、御歌の徳にて雨はれし事 | 九 |
| 八、宗房卿秀句の事 | 三 |
| 九、高師直辨内侍を奪び取る事 | 六 |
| 一〇、伊賀局化物に遇ふ事 | 二 |
| 一一、同局吉野川にて高名の事 | 四 |
| 一二、源中納言北の方發心の事 | 五 |
| 一三、中納言藤房卿すて文の事 | 三 |

二

一四、藤房入道高巢山にて讀經の事……………三三
 一五、藏王堂炎上に付御託宣の事……………三五
 一六、熊王發心の事……………四〇
 一七、康方水練の事……………四四
 一八、康方下女の事……………四七
 一九、鷹怪鳥をとる事……………五〇
 二〇、異果を食ひて死すること……………五一
 二一、兼好法師御來談のこと……………五二
 二二、公行朝臣閑居のこと……………五七
 二三、實勝朝臣北方の事……………六一
 二四、行輔卿の妾の事……………六七
 二五、鼻高き狂歌の事……………六九
 二六、松茸歌の事……………六九
 二七、犬王丸山賊にあふこと……………六九
 二八、楠墓落書の事……………七〇

二九、康村長重狂歌の事……………七一
 三〇、右馬允行繼遁世のこと……………七二
 三一、中納言局の歌の事……………七六
 三二、嵐山の事……………七七
 三三、作り山伏のこと……………七九
 三四、寛成御子鷹狩の事……………八〇
 三五、大宮託宣の事……………八四

目次

序 言

吉野拾遺は延元元年後醍醐天皇吉野に皇居を遷されてより後村上天皇の正平十三年に至るまで南朝凡そ二十三年間の事蹟を松翁と名告ぐる人の世を去り人を疎みて深山幽居の情をほし、いまにする傍思ひ出すまゝに書きつらねたるものにして、大小卅餘の話の中には天皇、親王の逸話天子の讚美別離義理人情のもつりなど不思議のことも断片的に書かれてゐる。筆の趣く所どこまでも自由に断片的に興味や感懐をかきしるしてある所に拾遺と稱する所以がある。文體はもとより平安朝物語の如き流麗壯麗治體麗と言ふやうな點はないが、しかし又それだけ更に深刻な敬虔なあるなにものかに満たされてゐる。本書の發刊は此の書中に認められた此の深刻な敬虔なある何物かを捕へ味はんとする人々の便利のためにもしたのである。専門學校及文檢受檢の参考たらしめんがためにも相當注意を拂つた積りである。

大正十四年七月

武藏野の楡の葉摺れに聲なき

世界の神祕を憧憬ながら

瞑想子しるす

吉野拾遺 上

主上吉野ノ宮ニテ御歌ノ事

先帝の御時世の中うつりかはりもてきて、吉野の假宮にわたらせ給ひ、憂かりし年も、事のさわぎの内にくれはて、春たつと言ふばかりなる、御節會のさまもいごかなし。

「世の中うつり云々」建武ノ中興ノ業ガ失敗シテ尊民叛キ正成義貞ハ戦死シ世ノ有様ガ立チカワリ移リ變ハリテ二度迄モ京都ヲノガレ給フタ。此ノ世ノ中ノコトヲ指シテ世の中うつりかはりもてきてト云フノダ。

「春立つと云ふ云々」正月ノカタバカリノ簡單ナ節會ト云フ意。

ささらぎの半過ぎゆくほどに御庭の櫻のやうく咲き出でたるを、
御覽せさせ給ひて勾當の内侍に仰せられける御歌

こゝにても雲のさくら咲きにけり

たゞかりそめのやどにおもへど

- 先帝、後醍醐天皇
- 吉野の假宮にわたらせ給ひ
- 延元元年十二月
- 御節會
- 朝延ニテ節日又ハソノ他定マレル公事アル時ノ集會ノ稱、饌ヲ群臣ニ賜フ。コノ上ニ元日の一ト加フレバ意味ガヨクワカル。
- いとかなしノ上ニ「いんなきときであつたから」チ加フレバ意味ガヨクワカル
- 勾當の内侍、内侍ノ司ニハ尙侍、スケ侍、掌侍ノ三職ガアリテソノ掌侍ノ上席ノヒノチ言フ勾當内侍ハ誰女ナ

リシカハ未詳或云
頭太夫行女房也ト
太平記ヲ考フルニ
行房ノ女ハ建武ノ
始新田義貞ニ賜ハ
リタル内侍ナレバ
恐ラクハ別人ナル
ヘシ。

○豊明ノ節會

新嘗祭ノ翌日(陰曆
十一月中ノ辰ノ日)
ノ節會ノ稱ヲ言フ
豊明院ニテ前日ノ
神供ノ新稻ヲ君モ
聞食シ群臣ニモ賜
フノデアル

○おほしなげく、
お思ひナサレテナ
ゲカレルコト。

「こゝにても云々」

コノヤウナタカカリソメノ宿ト思ツタ吉野ノ假宮デモ雲ノオリタヤ
ウニ、雲井ノ櫻ガ爛漫ト咲キ亂レテキルコトデアアルヲイ。
参考『新葉集』ニ春下吉野ノ假宮ニオハシマシケル時雲キノ櫻トテ
世尊寺ノホトリニアリケル花ノサカリチ御覽ツテヨマセ給ヒシモノ
ナリト。

おなじ帝豊明の節會をせさせ給へるに、あまりにかたばかりなるあ
りさまを、おほしなげかせ給ひけるに、袖振山のまぢかく見えわた
りければ

袖かへす天津をとめもおもひいでよ

よしのゝみやのむかしがたりを。

打なげかせ給うて、月ふくるまでおはしましけるに、御夢ともなく
袖ふる山の上よりしら雲のたなびきて、南殿の御庭の冬がれし櫻の
木末にとゞまりけるに、それかどばかりおぼしやらせ給へるに、を
どめの姿打しをれたるが、

○南殿の御庭紫宸殿
ノ御庭前

○それか天女ヲ指
ス。……

○妾打しをれたるが
悲シンテキル様子デ
アルノガ……。

「たるが」ノ下返歌す
るなりチ省イテ井
ル。

○わすれがたくコノ
下へこそチツケテ見
ヨ。

かへしなば雨とやふらむあはれしれ

天津をとめの袖のけしきを

どなくく詠じて、雪にかくれけるを、御覽じおくらせ給うて、御
心ぼそげにわたらせ給ひし御ありさま、わすれがたくこそ。

「袖かへす云々」「袖振山」ハ吉野ニアリ。御影山トモ言フ。袖振山チ舞姫ノヤウニミタ
テ、袖振ト云フコトカラ五節會ノ舞ノ事ヲ思ヒ出シタノデアアル。「むか
しがたり」トハ即チ天武天皇ノ古事カラ出タモノデ、天皇吉野ノ宮ニ
マシマシタ時、夕方琴ヲ彈ツテアラセラレタ所ガ、向フノ山ノ岫カラ
天女ガ雲ニ乗ツテ天降リ袖チヒルガヘシテ五度舞ツタ。之ガ五節ノ舞
ノ起源デアツテ「むかしがたり」トハ此事ヲ指スノデアアル。袖振ルト
云フコトカラ我君ノ興味ノコトヲ思ヒ出サレタノデアアル。五節ノ舞チ
舞フ乙女モ吉野ノ宮ノ昔ガタリチオモヒ出デヨトノ意テ内意ハ天武天
皇ハ不幸ノタメ吉野ニカクレ再ビ壬申ノ亂ニヨツテ位ニツカレタ。自
分モ亦ソレニナラツタノダトノ意チ歌ツタモノデアアル。

「かへしなば云々」私ガ袖チカヘシタナラ涙ガ雨ノヤウニ降ルデセウ。ドウカ天津乙女
ノ袖ノケシキチ御承知下サイマセ。コレハ天皇ノ事ノ成功セナイ事

稻荷明神臨幸ノ道ヲ照シ給フ事

○ひそかに出御云々
女房ノ姿ヲシテヒソ
カニ吉野ノ方ヘ云々
○いかにせんと云々
ドウシヤウカトオ互
ニ困ツテキタノナ陸
下ガ云々。
○金のみたけ云々
大和吉野ノ金峰山。

おなじ帝、花山院をひそかに出御ならせ給ひて、大和のかたへおも
むかせ給ひけるに、いとくらき夜なりければ、御供にさぶらひける
人々、いかにせむとわびあへるをきかせ給ひて「こゝはいづくのほ
ごにか」とたづねさせ給ひければ、忠房の侍従「いなりの御社の前
にこそ」と奏し給へば、御歌

う。ば。玉。の。く。ら。き。や。み。ち。に。ま。よ。ふ。な。り

われにかさなむみつのもし火

とて、伏し拜ませたまひければ、御社のうへより、いとあかき雲一
むら立出で来て、臨幸の道をてらしおくりて、やまどの内山にいら

せ給へば、雲は金のみたけの上にて消え失せにけり。まさしく御供
に侍りて見しここにこそ。

「うば玉の云々」ワレハ暗イ闇路ニマヤウテキル。ドウカ三ツノ燈火ナカシテモラヒタ
イモノダトノ意。「烏羽玉」トハねばたま(射干玉)野羽玉ノ義。黒キト
云フ語ノ枕詞、轉ジテ夜、月、夢、暗キ、寝ナド言フ語ノ枕詞ニモ用ユル。
「かさなん」カスノ未然形ニ希望ノ助動詞なんガ添フタモノ。「みつのだ
もし火」稻荷ノ社ニ三燈ツケルソノワケハ倉稻魂、猿田彦、大宮命ノ三
神ヲ祭ツテアルカラダ。ソシテソノ夜ハ三神祭デアツタカラデアアル。

吉水法印歌ノ事

おなじ帝、よし野へうつらせ給ひける又のとしの春、む月の末つか
た、よし水の法印にたまはせける御歌
みよしの、山のやま守こととはむ

今いくかありてはなは咲きなむ。

○又の年の春
翌年ノ春。
○む月、六月。

「みよしの、云々」「やま守」吉水法印宗信尊壽丸ヲ指ス。又吉水修業トモ云フ。

ミヨシノ、山ノ山守ニタヅネタイモノデアアル。今幾日経テ花ガ咲キ
ダステアラウコトチ。即チ天子ノ御運ハ何時挽回サレルデアアラウカタ
ズネタイノ意ヲ歌ツタモノデアアル。

勾當内侍歌ノ事

御返し

花さかむころはいつとも白雲の

ゐるをしるべにみよしの、山

おなじ御時、山のさくらをながめさせ給ひて、勾當内侍に、「折ふし
のうつりかはるこそ。昔のうたに、

おしなべてこのめも春と見えしより

花になり行くみよしの、山

○折ふしの……こそ
ノ下あはれなれが
略・誠ニ感慨無量
デアルノ意。

○昔のうた
昔自分ノヨシダ
歌。

とよみつる時は此の山をまだ見ざりし。

「花さかん云々」「白雲」ノ白ニ知ラチカク。「ゐる」ハタナビイテ井ルヲ意味スル。「みよ
しの」ノみよニ見よチ掛ク。花咲ク即チ皇運ガ挽回スル頃ハ何時トモ
知ラナイガ白雲ノタナビイテ井ルノチ花ノ咲クシルベトシテ見テオイ
テナサイ。陛下ガ御機嫌ヨク吉野山ニオイテニナレバ皇運ハヤガテ挽
回スルデアラウトノ意ヲ含ム。

「おしなべて云々」ドコモカモ草木ノ芽ガ張ルツノ春トナツタト思フ程モナク、此ノ吉
野山モ又花盛リニナツテシマツタソイ。春ノはるニ張るチ掛ケテキル。

今はたこゝに住みなれて、その折ふしの戀しくおもひ出でらるゝは
いかに」この給はすれば、ともに打ち泣き給ひて

いにしへをしのぶなみだはみよしの、

よしの、山の花のした露

と奏し給へば、いといたうあはれがらせ給ひけり。誠にかぎりなき
なみだの、いとしるく覺え侍る折ふし、雁の通りければ、おなじ内

○はた、副詞ヤハリ
ソレハソレデ、亦
ヤ、急迫ノ意。
○いとしるく云々
甚ダシク、イチジ
ルシク流ル、ト。
○雁の通りければ、
雁ガ京都ノ方チサ
シテ歸ツタカラ。

侍に、「心なく雁こそかくれ」このたまはせ給ひければ、

雁がねにわが身をなさばみよしの、

花は見すて、かへらざらまし

「いにしへを云々」吉野ノ山ノ花カゲニ露ガシトニオイテキル。ソノ露ハ今昔ヲ追懐スルト涙ガ出ルガソノ涙デアル。

「雁がねに云々」若シ私ガ雁デアツタナラコノ美ハシイ吉野山ノ花ヲ見捨テ、カヘリハシマイ、即チイカニ苦シイコトガアツテモ陛下ト共ニ進退スルノ意ヲ含メテ井ル。

「心なく雁こそ歸れ」雁ノ歸ルノチ見ルト自分モ京都ノ方ヘ歸リタイ。而シ自分ハ今ノ所歸ラレヌ。自分ヲ悲シマセルコトモ知ラズニ雁コソ歸ルコトデアルワイノ意。

内侍妹ノ方ニ返歌ノ事

おなじ内侍に、故郷の妹の君のかたより、「山のうちの御住まひこそ、おもひやられて、いとかなしうこそ」とありける御文の返事に、

○こそ、意味ヲ強ムル語、コンナ場合ニハ強イ言葉ヲ以ツテ

春は花秋はもみぢをみよしの、

山のかひあるすまひとをしれ

「春は花秋は云々」「みよしの」ノみハ見ニ掛ル。「山のかひ」ハ山ト山トノ間、狭イ間ト通ズ。コノかひハ又甲斐ニモ掛ル。

サソ淋シイコトデアラウト言ハレルガ春ハ花ヲ見、秋ハ紅葉ヲ見ルト云フヤウナみよしの、山ノ峽ノ住居ハ住ミ甲斐ガアルト言フコトヲ御承知下サイノ意。

御歌ノ徳ニテ雨ハレシ事

先帝の御時、さみだれのいと久しう降りつゞき侍べりける比、かんだちめあまた御前に侍らひ給ひて御遊のおはしましけるに、實世卿の「川音高きさみだれに、いはもと見えぬ瀧のけしきこそ、こよなう」と奏せさせ給ひければ、「さもこそあらめ。空さへはれなば」とのたまはせて

○かんだちめ公卿ヲ云フ。
○さみだれいさ云々按ズルニ延元四年ノ五月ノコトデアル。
○侍らひて伺候シテ。○御遊のおはしまし

譯スル。「實ニ」「一番」ノヤウ。
○おもひやられて推察セラレテ悲シイ氣持ガスル意。

ける云々
 音楽ノ御遊ノアツ
 タ時ニ。
 ○さもこそあらめ
 ソレハソウデアラ
 ウ。
 ○空さへはれなば云
 々

○コノ下へ自分モソ
 コへ行ツテ見ヤウ
 トツケバヨク意味
 がワカル。
 ○おどろしくくな
 る絵懸ニナツテク
 ル。
 ○かきくらししてマツ
 クラニナル。

○しのなつくが云々
 しの竹ノ小サク、
 細ク叢生スルモノ
 細稱
 竹ヲツカネタヤウ
 ニ降ルコト。
 ○さきにさりて
 程ヨキ機ニ。
 ○秋霧にをかされ、

秋ノ陰鬱ノタメニ
 健康ヲ害スルヲ
 かねて時をも云々
 アラカシメ前カラ
 死時壽命ヲ承知セ
 ラレタノデアラ
 ウ。
 ○仰せおかれて
 遺言サレテ。
 ○ものし給ひ
 ものすスベテ動作
 チ表ハスニ用フ
 モツテノ意。
 ○いざよひの月
 十六夜ノ月日暮ヨ
 リ少シ後レ猶豫ヒ
 テ出ル月ノ貌陰曆
 十六日ノ月ノ稱
 既望月。
 ○みすがたを云々
 ソノマ
 ○なをさめ奉り
 葬ルコト。
 ○人々は給ひけれ
 ども下ニ而も私に
 ナ挿入セヨ。
 ○人ごちも云々
 悲シクテ夢中ニナ
 ツテ井タカラ。

「川音高き云々」三度世ノ擬作ナラズヤト疑ハレテ非ル。
 死二角五月雨が降ツテタメニ水ガ川ニ溢レテ川音が非常ニ高マル程増
 水シタ。ソコテ岩ノ下ノ方モ見エヌ水瀧ノ景色ガ何ヨリ面白イ。トノ
 意。こゝガアルカラこよなう(コノ上ナク)トカール。

その明の日、とりあへず御幸ありけるに、観音堂のほとりまで、わ
 たらせ給ひけるに、空のけしきいとおどろしくなりて、又かき
 くらして、しのをつくが如くふりいでければ、御堂にしばらく立ち
 やすらはせ給ひて、

こゝは獨丹波のやしろし程近し

いのらば晴れよさみだれの空

「こゝは猶云々」コ、ハ雨ヲ司ル神ヲ祭ツテ井丹生ノ川上ノ社カラ程近イ所ダ、デア
 ルカラ雨ヲ霽ラシテクレヨト祈ツタナラバ晴レテクレヨ五月雨ノ空ヨ、
 即チ雨ガハレルヤウニ祈ラレタノデアアル。

と詠せさせ給ひければと。きにどりて晴れけるのみかは、日かげうら

ゝかになりて、それよりふらざりけり。帝徳のいみじうわたらせ給
 へるを、人々もたのもしくおもひあひけるに、おなじ八月の初め比
 より、秋霧にをかされ給ひけるが、かねて時をもしろしめしけるに
 や、同じ十五日の夜親王を左大臣經忠公の亭にうつし奉らせたまひ、
 三種の御寶を譲りおはしまし、御行末の事、いどこまやかに仰せお
 かれて、御劍と法華經とを左右の御手にもし給ひ、いざよひの月
 ごとにも、雲がくれさせ給ひけるに、つきしたがひ奉りし人々は、
 ただやみちにまよふこゝちなむし給ひける。
 御すがたをあらため奉らで如意輪寺の御堂のうしのかたにをさめ奉
 り、御おくりして、人々はかへり給ひけれども、さらに人ごちも
 なかりければ、御廟の前になきあかして、しのゝめ過ぐるほごをま
 ちてかしらおろし、かしこき御影のあたり近く、草の庵をむすびて、

- しの、め、アケホ
- アカツキ、アケホ
- ノ、曉天。
- かしらおろし
- 剃髪シテ。
- まごころむ
- まごころむ
- 目、義カトモ云
- 目、暫シ睡ル、交
- なみぬる
- 並ンテ井ル。
- おぼつかなく
- ヘンニ思フ、心許
- ナク……
- 資朝卿ハ
- コノ前九年ニ死ン
- テ井ル。
- よろづはからはず
- イロ／＼ノコトヲ
- サシズスル。
- 舊都
- 京都ノコト。
- 御本意
- ノゾミ。
- のたまひもあへぬ
- 言ヒ終ラヌ中ニ。
- そのきはの云々

- 臨終ノ時ノ云々。
- 玉のみこしに……
- ホメテ言フ語。
- めさるオメシニナ
- ルコト。
- 伶人、音楽ヲ奏ス
- 人。
- 打おごろく
- 目カサメル。
- 松吹ク風ノ音々
- 松吹ク風ノ音々
- モ音楽ニ聞ユルノ
- 意。
- ものから
- モノデ
- ものながらノ約。
- コ、テハソレカラ
- ト事柄ノツキオ
- コル意。
- 御影
- 御神靈。
- 伊勢和尙、姓ハ源、
- 疎石ト號ス
- 京都ニアル天龍寺
- ノ開祖デアアル
- 武家に心を合せて

なき御跡までつかうまつりけるに、その長月の十日あまりの月、い
 さまやかに見ゆるに、むかしの御事などおもひ出でて、

いまははやわすれはつべきいにしへを

おもひ出でよとすめる月かな

といひて、すこしまごろみけるに、御廟の前に、百官袖をつらねて
 なみぬ給へるをおぼつかなくおもひて、資朝卿のよろづはからはせ
 給ひておはします御袖をひかへて、とひ奉るに、

「いまははや云々」今ハハヤ昔ノ事ナドハ忘レテシマフベキ筈ノ昔ノ事ナドヲワザ／＼
 思ヒ出セヨト言ハンバカリニ月ガ澄ミヲタツテ井ルコトデアアルワイ。

「こゝにては舊都に程遠くして御本意をとげさせ給はむ御はかりご
 ともなりがたければ、龜山の仙洞に行幸ならせ給へるにこそあれ」
 どのたまひもあへぬに、御戸びらのひらき給へるに見奉れば、その

きはの御姿にて、玉のみこしにめされければ、伶人樂を奏し、百官
 供奉し奉りけると見て、打ちおごろきけるに、松吹く風に音楽の猶
 きこゆるものから、いつつの色の雲御廟よりいで、北のかたへ長
 うたなびきてみゆるに、さらになみだもどまらで、御影も今はこ
 ゝにおはしまさぬにやど、いとかなくして過し侍べりける程に、お
 なじき夜に、侍都にいます夢意和尚の夢に、君龜山の舊跡に行幸な
 らせ給ひて、群臣とともに宴させ給へると見給うて、武家に心を
 あはせて、御寺をいとなみ給へりと、後につたへ聞きけるに、今さ
 らのやうにおもひ出でられて、みな袖をしばり侍りし。

宗房卿秀句ノ事

先帝の御時、辨の内侍といひけるは右少辨俊基朝臣の御女なりけり。

足利氏ト心ヲ合ハ
 セテ。女官ノ名
 宮中ニ仕フル女官
 ノ名ハ親又ハ兄ノ
 役名ヲトル習慣ガ
 アル。○ものから
 モノテアルカラ、
 反對ノコトニ云フ
 時ト肯定ノコトニ
 云フ時トアル。○
 先帝御位を云々先
 帝ガ建武ノ中興ニ
 成功サレタ事。○
 ある夜
 コノ下ニ吉野の在
 所ヲ挿入セヨ。○
 ふたつばかりにわ
 れ云々
 縁起ガ悪イカラ
 御機嫌ガワルイ。○
 御心よげに云々
 雲ノ上カラ月ガ片
 破月ニナツテ出タ
 ソウスレバ縁起ハ
 ワルクハナイ。○
 故ニカク云フ。

御父におくれさせ給ふものから母君さへ世をいどはせ給ひければ、
 三位行氏卿のもとにおはしましけるを、先帝御位を復させ給ひしよ
 り御宮つかへし給ひけり。又世の中亂れて皇居も所定らざりけれど
 も、はなれ給はで、よしのまで参り給ひけり。ある夜御前に中納言
 隆資卿、洞院實世卿、宗房卿其の外あまたさぶらひ給ひけるに、み
 き給はせんとして、此の内侍の御かはらけもて出で給ひけるに、いか
 ゞし給ひけん、とりおとし給うて、ふたつばかりにわれければ、御
 けしきのいどあしげに見えさせ給ひければ、とりあへず、
 さかづきのわ。れてぞいづる雲の上
 このたまひければ、御心よげに「誰かつくべき」と、秀句にとりな
 させたまひければ。宗房卿
 星の位の光をへばや

といひ給へるに、興せさせ給ひて夜も明けなむとするまで、御酒参
 りけるに、山がらすの聲の聞えければ、隆資卿

還幸となくやよしの、山がらす

かしらもしろしおもしろの夜や

「さかづきの云々」「さかづき」酒杯ト月ニカケタノテアル。「わ。れて」月ノワレテト云フ

ヨリ端裂月ノ意千々ニ思ヒノクサクルノ意ヲ含ム。

「星ノ位」天子ノコト支那デハ三公ヲ三公星ト云フ。

一首ノ意ハ酒杯ガ割レタト言フヨリツ、イテ片破月ノ雲ノ上カラ割レ

テ出ルソノヤウニ一通リナラヌ戀シサニ千々ニ思ヒガクザケル。ソノ

ヤウニナツカシク戀シイ陛下ノ御威光チカガヤカシタイモノダ。

「さかづきの云々」ハ千々ニ思ヒノ碎ケルノ意ヲ表ハス序言デアル。

「還幸となくや云々」「吉野ノ山鳥ガコウノト鳴イテ面白イ夜ノ景色デアル。陛下ノ京

都ヘカヘラレルノチ祈ル故還幸ト出タノテアル。「還幸」漢ノ古事カラ

陛下ノ御カヘリニナルコトヲ山ガラスセ言ツテ井ル。ソレハ鳥ノ啼聲

ハヤウノト云フカラ還幸ニヨセタノテアル。ソノ鳥ハ頭ガ白イ。頭

ガ白イカラ尾モシロイト掛ツテ面白ト意味ス。

どのたまひければ、いどいたう御心よげにわたらせ給ひけり。

高師直辨内侍ヲ奪ヒ取ル事

○こゝろに、かく
 ○深ク戀シテ井ル。
 ○ウラメシク思フ。
 ○北の方
 ○女ハ陰テアルカラ
 ○北ト云フトゾ、大
 ○臣大將、公卿等ノ
 ○妻ノ尊稱。公卿等ノ
 ○さもには、からばせ
 ○云々
 ○私ト一緒ニ謀テ合
 ○ハセテ……
 ○さげなんには云々
 ○途ゲサシタラ領知
 ○チタクサシニ上ル
 ○ノ意、しらせハ
 ○知ルノ敬語テ領知
 ○ノコト
 ○なむ
 ○未來完了ノ場合ト
 ○アツラヘ望ム意ノ
 ○咏歎詞ノ場合トア
 ○ルタシトヘバ何ヤシ
 ○テ欲シイト言フヤ
 ○ウナ場合
 ○ふみなごのふ
 ○手紙ヲ書イテ……
 ○さしは、からばせ
 ○給ヘカシ、其ニモ

辨の内侍、御かたちいどめでたくさぶらひしを、むさしの守高階しなの
 師直、いかなりけん折にか見そめけむ、こゝろに、かけておもひける
 にみかどかくれさせ給ひて後、ひそかに御ふみ奉りて、「しのび出で
 させたまへ。御迎を参らせてん」と度々いひこしけれど、御返しも
 したまはざりければ、ねたくおもひて、行氏卿へかよひける女のあ
 りけるをもとめいで、北のかたに、「かゝる事なむ侍る。さもにはか
 らはせ給ひて、本意とげなんには、しらせ給はむ所をもあまたつ
 け侍りなむ。」
 三位どの、官位をもすゝめて「なごいひおこすれば、さらぬだに世
 の中の人のおそれぬはなきに、いとたのもしくきこえければ、御ふみ

梅が枝ト一緒ニヨ
 ○命を、かけて云々
 ○師直ノ爲メニハ命
 ○チ差出シテモツク
 ○スト契ル
 ○御戀しうおもひて
 ○ノ上ニおばなト入
 ○レテ見ヨ、云々
 ○はるかに、云々
 ○ズイブン遠方ニオ
 ○住シテネ
 ○山ざとの御住居
 ○吉野ノヤウナ山里
 ○ノ……
 ○さこそと云々
 ○ズイブン寂シイコ
 ○トデアラウト……
 ○袖をこそしぼりあ
 ○へ給はれ、イクラ
 ○泣イテモノ、泣キ
 ○キレモノ意
 ○せめて
 ○切ニアツテ、胸ニ
 ○意。コミアゲテナドノ

をどこのへ給ひて、内侍の君にもとつかうまつりし梅が枝といひし
 女をそへて、「ともににはからはせ給へかし」ときこえけるに、いとよ
 ろこびて、命をかけて契りける、侍甘人がほごえらびて、梅が枝に
 そへてよし野につかはしけり。内侍の君に「梅が枝が北の方の御ふ
 みもちてこそ」といひ入れけるに、「御戀しうおもひて過しつるに、
 こなたへ」とめされて、御文奉るに、「はるかにこそわたらせ給へ。
 山ざとの御住居さこそおもひやらるゝごに、袖をこそしぼりあ
 へ給はね。御戀しさのいとせめて、住吉へまうで侍りし程に、道の
 たよりもしかるべければ、あひ奉らんことをおもひて、河内の國と
 かや、高安のほごりにしりたる人のさぶらふに参りてこそ待ち奉れ。
 はかなき世の中のましてみだれがはしければ、此のたびならでは、
 いかで逢見ん」などかきて、

○御文のこゝろに
手紙ノ主意ト同ジ
ク。○
かきくどく
かき接頭語
ノ思フ方ニオトシ
手紙ノ主意ヲカラ
○それにもまさりて
母上ヨリ以上ニオ
ハサマが私チオ思

○青侍
○未熟ナ侍。
○途中人出あひて
○途中人出アツテ来
○人多クて云々。
○人オ多くテ事ガ面
○住吉までまかるに
○住吉マデマブツト
○行ツマデマブツト
○あれまで。
○住吉マデマブツト
○ばとおかれて候へ
○サマノ所マテオツ
○レ申スノ入レトテ
○合點ノ行カヌコト
○殘念ナ行カヌコト
○いかで行キナむ
○ドウシテ行クコト
○ガ出来マセウコト
○男ノ言フニハカマ

あひみんどもふこゝろをさきたて、

袖にしられぬ道しばの露

「あひみんども云々」内侍ニアハウトスル心バカリガ先キニ行ク、カヤウニアイタイト思
フ心ガ切ナルタメニ心ガ體ニ先立ツテ道ノ邊ノ雜草ニ置イテアル露チ
分ケテ行クコトデアリマス。
「すみよしへまうで侍りし程に云々」非常ニアナタ様ガ戀イシイカラ私ガ住吉へ参リマ
シタノニ道ノ都合モヨロシイノデアナタ様ニ面會シヤウト思ツテ、大
和ノ高安ノアタリニ知人ノアリマスレバソノ所オ待チシテ居リマス
……。

御使も御文のこゝろにかきくどきければ、「まことの御母君にすてら
れ参らせしよりは、それにもまさりて、おもひたまひし御情のわす
られで、朝夕こひしうこそおもひたてまつりつれ」とて、君に御暇
を奏したまひて、とりあへず出でさせ給へり。女房二人、青侍三人
御供には仕うまつりけるに、道に人出であひて、「高安にまたせ給ひ
けれども、「人多くてむつかしければ、住吉までまかるにこそ。もし

御出も候はゞあれまでぐし奉れ」と仰せおかれて候へば」とて、人
あまた出で、とりこめ奉る。「いとこゝろえぬことにこそ。すみよ
しまでははるく」といかでゆきなむ。御こしをかへせ、「このたまは
すれば、青侍ども御こしをかへしなむとしければ、「ただ住吉までい
そぎ給へ」とひきたつるに、「いかにもかなふまじけれ」と引きとゞ
むるを、「さ。ないはせ。」とて三人どもに打ちころしてけり。
君はいとおそろしく、鬼にとられ給へる心ちし給ひて、ただなきに
なかせ給へり。物のあはれをもわきまへぬものゝふども、情なう「こ
よひ住吉までいそぎなん。殿もそれまでいでむかひおはせむしなど、
いひのゝしりて、石川といふ所までおてゆきけり。帯刀正行がよし
野殿へめされて参るに行きあうて、そのほご過しなんど、かたはら
なる木蔭に立ちしのおを、心もどなくおもひて、立ちよりて事のさ

- ハヌデノ意ナタハ云々ノ上ニ加ヘテ見ヨ。
- さなはいはせそソナナコトヲ言ヒナサルナ。
- 物のあはれ人ノ情。
- 殿、師直ノコト。
- それまで住吉マデ。
- その程過しなんぞ云々。
- 正行ノ軍ガ通ツテシマウマデ。
- 心もさなく思ふ。
- 不思議ニ思フ。
- さてはさてソレデハトイツテ無理ニ……。
- 内侍辨ノ内侍ノコト。
- おしてムリニ。
- いかさまあやしければ甚ダ都合ノコトデアレバ……。
- からめにけりシバツテシマツタ。
- 恥をおもへる

まをとひけるに、「つばねがたの住よしに詣でさせ給ひける」といふに、「さては」とて過ぎなんとするに、内侍のなき給ふ聲をきいて、おして御こしのほどりに立ちよりてとへば、「かうくのことになむ」とのたまはするに、いかさまあやしければ、奏しなんほごに皆のしとれとて、のこらずからめにけり。

恥をおもへるもの三人四人ありて、抜きあはせれたかひけれども、つひに打ちころしぬ。吉野へ参りて、事のよしを奏し奉れば、梅が枝をすかしてとほせ給へば、はかりつる事を申しけるに、侍どもは皆さられて、梅が枝は尼になし給ひて、かゝる有さまを北のかたへよくく申せよとて、歸されにけり。「政行なかりせば、いと口をしからましを、よくこそはからみつれ」とて、内侍を正行に給はんと、みことこのりありければ、かしこまりて、

- 恥ヲ知ツテ居ルモノガ。
- すかしてダマシテ。
- はからひつれトリハカツタモノダ、處置ヲシタモノダ。
- 口をしからましな残念ナコトニナツタデアラウニ……。
- こゝろへがたく云々。
- 合點ガツカナカツタガ。
- いさおしみあひにけり。
- 誠ニチシイコトニ思ツタ。
- 新待賢門院ハ後村上天皇ノ御母。
- 門院國母ニ奉ル尊號。
- 局父又ハ兄ノ官名ヲトツテ名トスル習慣ガアル。

とても世にながらふべくもあらぬ身の
 かりの契をいかでむすばん
 と奏して辭しにけり。其の時はこゝろえがたくおぼえしが、後におもひあはされて、いとゞをしみあひにけり。

「とても世に云々」到底此ノ世ノ中ニ長ラヘルコトノ出来ナイ身故、ホンノシバラケノ約東ナドウシテ契ルコトガ出来マセウカ、逆テモ出来マセヌノ意。

伊賀ノ局化物ニ遇フ事

新待賢門院に、伊賀のつばねといふありけり。
 これは左中將義貞朝臣の侍に、篠塚伊賀守といへるが女になんありける。女院の御所は、皇居の西のかたにて、山につゞける所なりけり。去ぬる正平ひのこの亥のとしの春の此、化物（ばいぶつ）ありとて、人々

○心ち悪しく
 氣分ガ悪ルクナル。
 ○御殿の居人
 御殿ニ伺候シテ井
 御人宿直人。
 ○水無月
 六月。○ひさり
 六ひさりごち給ふ
 六月。○ヒトリ
 ヒトリゴトヲ言ヒ
 ナサレタ。○心
 心しづかなれば云
 ナサレタ。○心
 心ニ少シモ煩ガナ
 ケレバ身モオチツ
 ク心ニ悶アル故カ
 ク落着カズニナル
 ノダノ意。
 按可是禪房無熱到
 但能心靜即身涼云
 ヲカラビタル聲
 朗詠ノ聲。

○見上げ給へば
 コレハ伊賀ノ局デ
 アル。
 ○打ちわらふ
 伊賀ノ局デアアル。
 ○誠にさこそあり
 けれ、誠ニ評判ノ
 通りダ。
 ○さもあらばあれ
 ソレハ兎ニ角ア
 レ。
 ○なきあさを云々
 菩提ヲ弔ヒナサル
 答デアアル。
 ○いやまさる
 いや(イヨ)マ
 サルノ意。
 ○啓して給はん
 申し上ゲテ下サ
 イ。門院ニ。
 ○ことかは
 コトデセウカ。
 ○世のみだれに云々
 世ノ戦亂ノタメニ

さわぎおそれ給へり。形をしかと見さだめたるものもあらず。行き
 あひけるものは、心あしく成りにけり。内裏より御どの居人あまた
 参らせ給ひて墓目ひたのなごいさせければ、そのほどはしづまりにけり。
 水無月十日あまりの程に、いとあつき比なりければ、此のつぼね庭
 にいで、立ち給へるに、月のさしいで、いとあか、りければ、
 すゞしさをまつ吹く風にわすられて

袂にやごすよはの月かけ

とたれきく人もあらずと、ひとりごち給へるに、松の梢のかたより
 からびたる聲して、「ただよく心しづかなれば、すなはち身もすゞし」
 といふ、古き詩の下句をいふに

「すゞしさを云々」「松吹く」松ハ待ツニ掛ル、涼シサヲ待ツコトモ松吹ク風ノ涼シサ
 ノタメニ忘レラレテシマツテ、ソジテ袂ニ夜半ノ月ガサシテ何トモ形
 容ノ出来ヌ程爽ヤカナ氣分ニナツタ。

「暮目」ひびきめノ約、鏃ノ一種戰ニ用フル矢デハナクテ、鏃ノ矢尻ノナキモノ



カサカケ、ヤブサメノ時用フル矢、脅ノタメニ放ツノデアアル。

見あげ給へば、さながら鬼のかたちにて、翅のおひ出でたる、眼は
 月よりも光りわたるに、たけきものゝ心の心もきえうせぬべきに、
 打わらひ給うて、「誠にさこそありけれ、さもあらばあれ、いかな
 るものにかあるらん。あやしくおぼゆるにこそ。名のりし給へ」と
 とはれて、「我は藤原の基任にこそ侍れ。女院にやいんの御爲に命を奉りさぶ
 らひしに、せめてはなきあどをとはせ給はむことにこそあれ。それ
 さへなく候へば、いとつみ深く、かゝる形になりて、くるしきこと
 のいやまされば、うらみ奉らんとおもひて、此の春の比より、うし
 ろの山に候へども、御前にはおそれて参らぬにこそあれ。此のよし
 啓して給はなん」とこたへければ「げにさは聞きおよびし。されど

忘レテオ出ニナル
 ノテアラウ。
 ○何々シテヤラウ。
 ○心にまかせ侍らん
 ○望ミ通りニシマセ
 ○た、其のこぼばか
 ○リ云々
 ○タマソノ事ダケテ
 ○ス、アトニ心ノ残
 ○ルコトハナイ。
 ○露と消えにし
 ○討死シタ……。
 ○うかれる
 ○迷フノ意。
 ○仰ゴゴありて
 ○仰ニナツテ……。
 ○少シモ。
 ○いさたのもし
 ○アケツコウナコトテ

うらみ奉るべきことかは。世のみだれにおもひ過したまへるぞかし。其のこどわりならば、啓して弔ひてん。さるにても御經にはいかなることかよるべき。心にまかせ侍らん」このたまへば、「たゞ其のこどばかりにこそ候へ。御弔ひには法華經にしくはあらじ。さらばかへりなむ」といふに、「歸らん所はいづくにか」この給へば、「露と消えにし野原にこそ、なき魂はうかれ候へ」とて北をさして光りもてゆくをみおくりて後、女院の御前に参りて、啓したまひければ、「誠に、御堂にて三七日法華經を供養し給ひければ、其の後はあへてことなることもなかりし。うかびてやありつらん。いとたのもし。」

同局吉野川ニテ高名ノ事

○この局、伊賀ノ局。
 ○防ぐべき先年。
 ○防グベキテダテ方
 ○法。
 ○はかしくしき
 ○シツカリトシタ。
 ○あきれた、せ云々
 ○ホンヤリト途方ニ
 ○暮レテ立ツテ……。
 ○ひき折リノ意。
 ○ミナ折ツテノ意。
 ○いかめしき
 ○オソロシイ……。
 ○左馬頭正儀
 ○正成男正行ノ弟。

この局、一とせむさしのかみ師直が、皇居をおそひ奉る時に防ぐべきたよりのなかりければ、人々猶山深く入らせ給ひけるに女院の御供に、はかしくしき侍も奉らで、女房たちばかりなりけり。よしの川の橋一けんが程、ふみおとしてありけるに、せんかたなくて、みなあきれた、せ給へるに、このつばね、そのほとりの松櫻のおほきなるこだごもを、ひき折り、打ちわたして、女院をおひ奉りて、人々をわたしたはて給ひけり。後にそのときのおほきさなる枝を、園部の六郎にをらせて御覽ありけれども、かなはでやみにけり。いといかめしきことにぞありける。今は左馬頭正儀の妻になんなり給ひし。

源中納言北ノ方發心ノ事

○源中納言、顯家。
 ○みちのくの軍、奥

先帝の御時、源中納言みちのくの軍を、あまたしたがへたまひ、道

○州五十四軍ノ兵。さきだちて云々
 ○到着セナイ故カク云フ。
 ○うへよりはじめ天皇ヲハジメトシテ。
 ○そのきはの戦死ノ際ノ……
 ○参りて云々……吉野ノ行在所ヲ云フ。
 ○さもし火のきえぬるやうに
 「全クサメテシマツタ」ヲ挿入シテミヨ。
 ○いっばかりおぼすにか
 ○ドウ言フ考ヘニナツタノカ意。

○北の御方、日野中
 ○御心ちもなし
 ○正氣モナイノ意失念スルコト。
 ○御こゝちの云々

蘇生シテ正氣ガツクコト。

○なほ同じ道に云々
 ○自殺シサウナ様子ニ見エルコト。
 ○御ぐしおろす剃髪スルコト、佛門ニ入ルコト。

○緒ノ縁語
 1、たえ
 2、くり
 3、むすぼる、

々を平げて、美濃の國までおはしけるよし、さきだちて聞えければうへよりはじめてたのもしきことにおぼし給ひけるに、あべ野の露ときえさせ給ひけると、刑部丞友なりが。そのきはのありさまを、参りてなく／＼かたるに、さもし火のきえぬるやうになむ、人々のこゝろはなりにける。御父の卿は、いかばかりおぼすにか、

さきだてしこゝろもよしや中々に
 うき世のことをおもひわすれて

「さきだてし云々」彼顯家ガ勝ツニツケ負ケルニツケ兎角心配デアツタ。故ニ彼ヲ先立テタコトハ親子ノ情トシテハ悲シイガ今迄ノ心配モ消エ失セテ、ムシロカヘツテ心安イコトデアアルノ意、實ニ斷腸ノ感ガスルデアハナイカ、北の御方はたゞふししづませ給うて、さらに御心ちもなかりけるを、さわぎておもてに水などそゞぎしほごに、またの日の夕ぐれのほごに、すこし御こゝちの出でさせ給ひて、

玉の緒のたえもはてなでくり返し
 おなじうき世にむすぼるらむ

なほ同じ道にと、おぼしたち給へる御けしきの、いちじるく侍りければ、立ち去り給はで、人々のまもりければ、御心にもまかせ給はで、観心寺といへる山寺にて、御ぐしおろしてすませ給へるに、そむきても猶わすられぬ面影は

うき世の外のものにやあるらむ

「玉の緒の云々」「玉の緒」長キ、短カキ、絶エ、亂レ命等ノ枕詞「くりかへし」玉ノ緒ノ縁語「むすぼる、」玉ノ縁語、思ヒノハレメコト、ウツ／＼タルコト。「らむ」歌ニ限ツテらむト言フ助動詞ノアル時ハ往々ノ意トナルコトガアル。
 命ガ絶エテシマヒモセテ又モトヘ生キカヘツテ同ジコノ浮世ニ苦シイ物思ヒヲモツテ暮スコトニナルノデアラウカ。
 「そむきても云々」世ヲ捨テ、モ尙忘レラレナイ面影ハソレハ浮世ノ外ノモノデアリマセウカ。

○こゝに
コノ吉野山ニ。

○給ふさて
給フト云フノテ。

○御名残の云々
御名残ノツキメヤ
ウナ御様子デアツ
タカラ
○山の端は云々
山ノ端ニアルノガ
○こゝなん其の人の
其ノ人トハ顯家
卿ノコトデアル。

こゝに三年が程過し給うて、世のさわぎも少しづまりければ、
さすが故郷のかたやおもひ出でさせ給ひけむ、よしの山をたどりい
でさせ給ふさて、

いづくにか心とどめむみよしの、

よしの、山をいで、ゆく身は

「いづくにか云々」昔カラ世捨人ハ皆吉野山へ行ツタガ今此ノ吉野山チ出テ行ク私ハド
コニ心ヲ止メヤウカ。

親房卿の御もどに、しばしおはしまして、あかつきがたに立ち出で
させ給ひけるに、御名残つきさせ給ふまじき、御こゝにてありけれ
ば、かへり見させ給へるに、有明月のいとさやかに、山のはちかく
見えければ、

別るれどあひもおもはぬみよしの、

みねにさやけき有明の月

阿部野を過ぎさせ給ひけるに、こゝなん其の人の消えさせ給へる所
とつげれば草の上にたふれふさせ給うて、

なき人のかたみの野への草枕

夢も昔の袖のしら露

「別るれど云々」「みよしの、」ノみハ身ニカイル。

世ヲ捨テテ身故夫婦デアアルガ互ニ思ヒ合ハメ身デアリ乍ラ峯ニサヤ
ケク照リガヤイテ井ル有明ノ月ヲ見ルト流石ニ色々ノ事ヲ思ヒ出サレ
テ夫ガ戀シク名残惜シクナツテケル。

「なき人の云々」「野邊」トハ阿部ノ野ノ意テ顯家卿ノ死ノ所。

阿部ノ野ニ狩獵シテコレガ亡キ人ノ形見ノ草デアアルカト思フト夢モ昔
ノ顯家卿ノコトヲ思ヒ出サレテ泪テ袖チヌラスノデアリマス。

このほごりに刑部丞ともなりが、世をそむきてありけるをたづねさ
せ給ひけるに、いそぎ参りて、御ありさまを見奉るにさしもゆかし
くわたらせ給ひける御よそほひの、いつしかおはりおとろへさせ給

○世をそむく
週世スルハ一月十
九日
○さしもゆかし云
アレ程立派ニオイ

アニナツタ御様子
ノ……。

ひけるにやと、なみだどよめあへで、住吉、天王寺のほとりまで、
御おくりの参りて、所々あないしけるに、天王寺の龜の水のほとり
の松の木をけづらして、

後の世の契のためにのこしけり

結ぶ龜の水の茎のあと

と書きつけ給へり。

「後の世の云々」極樂浄土へ往生スルタメニ佛ニ約束スルタメ龜井ノ水ノほとりニ一筆
書キ殘シテ置キマシタ。結ぶ龜井の云々」掬ア龜井ノ水ソノ水ノ邊ニ
筆ノ跡ヲノ意、水茎トハ筆ノ意ニモ使ハレル語「水茎の跡」トハ書イタ
文字、ナド、云フ用例モ多イ、筆ノ跡、即チ文字ノ意。

それよりともなり入道はかへりにけり。

一とせ尋ね來たりてかたりけるに、いとあはれにおもひ奉りて、そ
のち天王寺へ参りけるに、御筆の跡のきえもはてずして、のこりけ

○一ささノ上ニ
誠ニ堪ヘラレナイ
コト、思ツテチ加

ヘテ見ヨ。

○母君
資朝ノ奥方。
○失せさせ云々
北ノ方アル。
○わらは
又自分チ卑下シテ
妾ト稱ズ。
單稱わらは、わら
はへ
童
復稱わらへ
わらんへ
わらんへ
コ、テハ子供ノ
意。

るを見参らせて、そとろに袖をしぼりけるにこそ。

中納言藤房卿ステ文ノ事

其の後、舊都にのぼらせ給ひて、母君もともに世をそむきおはしけ
るが、さきだち給ひて、又のどしの春、失せさせ給ひけりとぞきこ
えし。日野中納言資朝卿の御女なりし。

おなじ此、大納言實世卿の御許へ、わらはの御ふみもてきたりける
を、見給はせければ、

君が住むやどのあたりを來てみれば

むかしにぬらすすみぞめの袖

「君が住む云々」君が住ンテ居ラレル宿ノ附近ニ來テ見ルトソ、ロニ昔ノ事チ思ヒ出サ
レテ我法衣、袖ヲ濡ラスコトアルソイ。「むかしに」ノにハ動作チ起
ス原因チ意味シテキル。

○御手もさながら
筆跡モソノマ……
○又ハマルデノ意
○いそぎ皇居ヘ云々
此ノ上ニ藤原卿ト
察シタカラチ挿入
セヨ
○大和、紀國、河内
コノ範圍ガ吉野朝
廷ノ勢力範圍デア
ル
○せきくニ云々
關所くニ

○あないを知らむ云々
ソノ邊ノ形勢ヲ知
ラウト思ツタタメ
ニ
○岩をかたどりて
岩チ一方ニトル、
ソシテソレヲヨ
リトシテ建テル。

御手もさながらむかしにかわらぬを、あはれとおどろかせ給ひて、御使の童をめしよせて、とほせ給へば、今朝西なる野べにいで、草をかりはべるに、やせおどろへたる修行者の、このふみとゞけてよとおほせさぶらひしといふに、いそぎ皇居へ参り給うて大和、紀國、河内、せきくにみことのりして、修行者をとゞめけれども、それともおぼしきもあらざりけらし。中納言藤房入道の御手にてありけり。

藤房入道高巢山ニテ讀經ノ事

刑部卿義助朝臣の越前國よりいまして物がたりに、越前の國鷹の巢の山といふところは、高くそばだちて、城郭にしかるべきところなりければ、畑六郎左衛門時能といふ兵にまもらせけるに、あないをしらむがために、なほおく深くわけ入りにけるに、谷川のいとさよ

○いかにし給ふにや
○ドウナサルデアラ
ウカト
○むすぶ
○榑即チスクウテ
榑ニ榑
○寺院等ニアル佛ニ
アケル水入。
○そこにはいかに
オ前ハ誰ダ
○本意なきさま
○ハリアイナク、ツ
マラメ様子ノ意
○かへりてさふらふ

くながれけるを、その水上をたづねにのぼりけるに、さし出でたる岩をかたどりて、松の葉にてふきたる庵の見えけるを、かゝる處にもすむ人のありけるにやと、たちよりて見侍れば、木の葉をあつめてむしろとし、たひらなる石の上に、法華經を置ける外にはなにも見えず。しばしありけるに、山路をたどり來る人を見れば、瘦せ衰へたる僧の櫛を手にもてり。いかにしたまふにやと、物のかくれより見けるに、谷川の水をむすびて、庵のうちにいり、經のひもをときけるほどに、よみはじめ給はぬさきにと、いそぎ行きて、かゝる御住居こそ、いと貴くおぼえ候へ。いかなる人の世をそむかせ給ひけるにやと、とひ奉るに、「そこにはいかに」とたづねさせ給ひけるほどに、名のりをしつれば、いと本意なきさまして、「あづまのものにこそ」とばかり、の給ひて、經をよみ給ひしまゝに、かへりてさふら

此ノ上ニ取り合ハ
ナイカラシカタナ
シニ：ナ挿入セ
ヨ。○
○いさゆかしく
スベテ追究的ノ興
味ヲオコスコト。
○御面影
御様子。
○言ハレルノデ：。

○さらに……すへナ
イドウシテモ……
○いさほいなくて云
々誠ニ残念ニ思ヒ
マス。トヨシスケガ
言ツタ。
○ありがたき御心に
こそ
誠ニ殊勝ナ御心ガ
ケテアル。
○おさしてけり
オトシマシタ。
○さしも
アンナニ。
○人のきしがごさ

ふ。藤房卿の御面影して侍るといひしまゝに、いとゆかしく。一
少將をとまひて参りけるに、庵は其のまゝありて、僧は見え給は
ず。經のありつる石ときこえしに、
こゝも又うき世の人のとひくれば
空行く雲にやごもどめてむ

とかきつけ給へる筆のあとを、少將のよく見しり給ひて、そのほとり
の山々をたづねさせ給ひけれども、さらに見え給はねば、いとほ
いなくて。』との給ひしを、人々ききもあへ給はで、みななみだあとし
てけり。さしもいみじかりける人のききしがごとの御住居は、誠にあ
りがたき御心にこそ。年月をあはせて見侍るに、君が住むやごといひ
こされしは後の事なり。こしのかたよりつくしへ通り給ふらん折に
や。そののちはたえて御おとづれもきかざりき。この藤房の卿は、

ヨシスケガ話シタ
ヤウナ……
○年月をあはせて見
侍るに、ソノ年月
ナ合セテ考ヘテ見
ルニ。
○このかたより
越前ノ國カラ。
○九州へ……
○折にや折にやあら
ん。テ途中デアツタ
ノデアリマセウ。
○御おさづれ云々
何等ノ消息モナカ
ツタ。
○御寵愛。
○出家スル。
○藏王権現
後世の吉野町藏王
堂ノコト。
○役の優婆塞
大和人ノコト。
○博學デ呪術に通ジ
葛城山に入り、三
年に居るこゝ三十餘
年能ク鬼神ヲ驅使

大納言宣房卿の御子なりし。才智世にすぐれさせ給ひて、君にも御
覺の淺からで、中納言までなり給ひしが建武きのえ戌のとしの春、
俄に世をすて給ひし。

吉野拾遺下

藏王堂炎上ニ付御託宣ノ事

藏王権現は役の優婆塞の行ひ出ださせ給へるよりこのかた、靈驗あ
らたにわたらせ給ひけるにより、大塔金堂玉をみがき、南のかたに
は金剛力士のたゝせ給へる二階堂。門東には救世觀音の御堂。阿彌
陀如來の御堂は西のかたに立たせ給へり。中にも大威徳天神の社は、

- シタト云フ。
- 金剛力士ノ二神。
- 佛法守護ノ神。
- 俗ニ仁王ト云フ。
- 大威徳天神ノ社。
- 管公チ祀ツテル。
- 日藏上人ノ弟デア。
- 三善清行ノ弟デア。
- 正平つちのえれの。
- 年。
- 正平三年。
- 役ノ行ノ行者。
- 行ヒ出ダセ給フ。
- 修業チソコテハジ。
- メテスル。
- 靈驗。
- 御利益。
- 大塔金堂。
- 本尊チ祀ル堂デア。
- 來ハ金チチリバメ。
- テ井ル。
- 二階堂。仁王門チ。
- 指ス、堂カ二階ニ。
- ナツテ井ルカラカ。
- ヤウニ言フ。
- さしも云々。
- サシモ立派ナノキ。
- チナラベテ井タノ。

日藏上人の冥途にて延喜のみかどの勅をうけ給ひて、此處にいとなませ給へるとかや。

さしもゆゝしき、のきをならべておはしましけるを、正平つちのえねのとし、む月の比にや、帶刀正行が世をみじかうおもひとりて、ちからのおとろへぬうちに、君の爲、父の爲に討死してむとて、先帝の御廟に詣でて、心をひとつに思ひさだめけるともがらの名を書きつけて、敵の陣にむかひけるが、多くの軍をおひなびけて後、終にうち死せしいきほひにのりて、むさしのかみ師直が四萬餘のいくさをしたかへ、皇居をおそひ奉りしに、ふせぐべきたよりなかりしかば、君をはじめ奉りて、猶山深くいらせたまひけるに、皇居をはじめ參らせて、おほくの伽藍を焼きほろぼしけるが誠にあさましきわざなりけり。神といひ、佛といひ、二世のくるしみを、いかでか

- む月。
- 正月ノコト。
- 世ヲ短イモノト云々。
- 世ヲ短イモノト云々。
- 長生ハ出来ヌモノト即。
- ト思ツテ。(有待。
- ノ身。
- 心ヲ合ハセテ戦チ。
- 心ヲ合ハセテ戦チ。
- セウトスル人々ノ。
- 名チ。
- おひなびけて。
- 追ヒシリドケテ。
- 佛ももとは衆生ナ。
- リ云々。
- 佛説「佛元是衆生。
- 衆生即佛」トア。
- ル。
- 終に討死せし云々。
- 正行ガ討死シタノ。
- デア。
- イキハいにのりて。
- イホイニ乗シテノ。
- 意。
- たより方法。
- 伽藍。寺。
- 衆徒。吉野ノ法。
- 師。
- 夜もすがら。
- 夜ガ夜中。

のがれさぶらはんや。かくていくさごもかへりしかば、かたばかりなるがりやをつくりて、本尊をうつし奉るに、衆徒の中に、何がしの法眼とかやいひしが、夜もすがら、あまへにさぶらひて、「今は佛の御ちからもうせさせ給ひけるにや。かくあさましき御ありさまにこそ、柔和の御姿をひさかへさせ給へる。御しるしもなかりつれ」

とて、さめざめと泣きて、うちねぶりけるに、ゆめごもなく、うつゝともなく、柔和の御尊體のあらはれさせ給ひて、よしやたどうらみずともあらなむ。佛はたど迷へる衆生をみちびかんがために、此の土には濟度方便のことにこそあれ。佛ももとは衆生なり、衆はつひの佛なり。罪をつくりしうへにこそ、また罪をもあたへめ。さしむかひては本意にあらず。それとしらるゝ事のなごかなからん」と

- おまへに
コレハ阿彌陀ノ前
ノ意。
- 今は佛の云々
コレハ法眼ノ言ツ
タ言葉。
- 柔和の御姿云々
佛ノ力モナクナツ
テシマツタノデセ
ウカ。
- 御しるし云々
佛ノ力モオトロヘ
テハ靈驗モナイモ
ノダ。
- よしやた云々
ドウカウラマナイ
デモラヒタイ。
- 此の土には濟度云々
此ノ世ニハ人々チ
救フタメニ色々ノ
工夫チスルノガツ
トメダ。
- 罪をつくりし云々
コレハ衆生ノ罪チ
云ツタノデアアル。
- 衆生が罪チツクツ
タカラ又罪チモア
タヘルノデアアル。
- さしむかひては云々

うらむなよさてやはやまん梓弓

眞ゆみつきみとしはふるども

「日藏上人の冥土にて云々」延喜ノ帝トハ醍醐帝ヲ指ス。日堂上人ガ天慶四年金峯山テ
三週間絶食シテ修業セラレタ。ソシテ八月一日冥途ニ行カレタ。ソノ
靈ガ地獄ニ行クトソノ中ニ醍醐天皇及ビ四人ノ獄卒ガアツタ。ソコデ
帝ノ申スヤウ自分ハ菅公チ苦シメタ故ニコソナヒドイ目ニアツタ。ソ
レテ汝ハアノ世(婆娑即コノ世ノコト)ニ歸ツテ社ヲ建テ、菅公ヲ祀ツ
テタレト言ハレタトノ古事カテ出テ井ル。(元享釋書ニ見ユ)

「神さいひ佛さ言ひ二世の云々」神社ト言ヒ佛寺ト言ヒ之チ焼キツクスコトハ後世ノ貴
苦チ免レルコトハ出来ルモノデアナイ。

「それさしらるゝここのなどかなからん」ソレトワカラナイコトハナイ即チ罰チウケル
事ガアルトノ意テ換言スルト罰チ與ヘルコトチ後ニシテモ前ノバチガ
ドウシテ知ラレナイコトガアラウ、ソレニヨツテ前ノ寺チ焼イタ罰ダ
ト言フコトガ分ルトノコトデアアル。

「うらむなよ云々」此ノ歌ノ原歌ハ伊勢物語ノ「梓弓眞弓つき弓年を経てわがせしがこ
さうるはしみせよ」ニ由ツタノデ、伊勢ノ歌ハ又「弓さ言へばしなきな
ものを梓弓ま弓つき弓しなこそあるらし」ト云ツタ神樂歌カラ出タノ
デアアル(色々様々ノ事ガアツテ年月チ經ルヤウナコトガアツテモ決シ

- 打おごろく
目ガサメテ...
- おぼつかなく云々
アテニナラヌト思
フテ...不信ナル
- 御みかた、南朝方、
○武藏守師直ノ下。
- そのをり師直ガ亡
ビル折。
- こゝにもらし侍リ
コノ本ニハ何モ書
キマセン。
- 都にかへる、北朝
ニツクコト。
- 天にそむきて天道
ニツムイテ。

テソノマ、デアムモノデアナイカラサウウランデケレルナヨノ意)「や」
ハ反語ノ意ガアツテ矢ニ掛リ梓弓ノ縁語デアアル。

といひすてさせ給うて、あかつきの月の山のはにかくれさせ給へる
がごとなりけるに、打ちおごろきて、そのありつる事を、悉くし
るして奏し奉らるゝに、人々もおぼつかなくおぼし給うて、深くを
さめおき給ひけるに、はたしてあけのとしより、尊氏と直義との中
らひあしくなりて、直義は御みかたに参り、またのどしの二月のほ
ごに武藏守が一族みな亡びにけり。そのをりにさまんふしぎのあ
りけるよし、つたへ聞きしかど、見ぬことなりければ、こゝにもら
し侍り。直義も君の御力をかり奉りて、わたくしの本意をどげぬれ
ど、また心がはりして、都にかへりけれども、誠の道ならねば、天
にそむきて、其の秋の比にや、東にて尊氏の爲にころされけりぞぞ
聞えし。

熊王發心ノ事

○赤松光範、赤松範資男、則村圓心ノ孫。○津の國のカタメありける云々。○攝津守護職デアツ去ぬる住吉の戦。○正平七年ノ戦。○正儀和田正忠ト共ニ夜に乘シテ桂川ヲ渡リ拂曉細川顯氏ノ陣ヲ衝イタキ野六郎ハコノデアラ討死シタノデアラ

○大夫判官 檢非違使尉大夫ハ五位ノ檢非違使ノ判官ハ檢非違使ノ三番目ノ役

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

○かため守護 ばかられる計略

大夫判官赤松光範が津の國のかためありける時、左馬頭正儀に度々はかられけるを口をしくおもひこめて、過し侍りけるに、去ぬる住吉のたゝかひに討たれて失せし、宇野の六郎といひしが子は、熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは、「正儀は我が爲にも親の仇にてさふらへば、いかにもしてうち侍らん。河内へこえて、正儀に仕へはべらんにおさなく候へば、などか心をゆるし申さぬことのならるべき。たとひこゝろをゆるすことのはべらすとも、七とせ八とせ程も仕へ候はゞ、そのうちには討ちぬべきたよりの、いかでなからん。御いとまをこそ給はらめ」と涙をながせば、光範もいとあはれとおもひながら、「をさなければ、敵の國へやらんもこ

ニカケラレテ破ラレコト。○我がためにも云々。○君ノ仇ナルハ勿論ナレドモ云々。○仕へ侍らんニ。○仕へるもなし。○覺束ナイ不安心。○命にかはりて云々。○光範ノ身代リトシテ討レタ六郎ノ子。○おごなし成人スルコト。○一門にて侍る云々。○之ヨリ以下ハ虚偽ノ申立テアル。○おひうちテ。○オヒハラツテ。○ウロツクコト。○わが所。○自分ノ所。○さかしくてな。○利口申サザリマシテナド申ス。○思ひつきて

どろもとなし。又は命にかゝはりてうたれしものゝ子なれば、かたみともおもふべけれ」と、しひてとゞめ給ひけれども、「すこしおとなしくなりなば、よもちかづけ給はじ。おさなくありなん時参りてこそ」と、しきりにのぞみければ、ちからおよび給はで、つねに身をはなち給はざりし刀をたまひて、「是にて本意とげよ」とて、阿部野まで、人あまたそへてやらせけるに、それよりは我にひとしきわらはひとりを具して、赤坂の城にゆきて、そのほざりにたゝすみてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、いかなる人にかおはすらんと、たづねられて、「われは大夫光範のさぶらひにて、宇野の六郎といひけるものゝ小子に、熊王といへるものにて候ふ。父にて侍る六郎は、去にし時住吉のたゝかひにうたれて候を、一門にて侍る備後守が、我をおひうちて、領地を奪ひ候へども、光範と心を合せ候へば、せん

○自然ニナツイテ、
宮仕ヘ天子ニ仕ヘ
ルコトニモ云フガ
コトハ奉公チス
ルコト。
○しらさん
領地、知行地トシ
テヤル。

○和泉寺
名ハ正武、左衛門
尉、正行正儀ト共
ニ王事ニ盡瘁シタ
人。

○七めぐり七回忌。
手向にもし
タムケニサ、ゲ又
○元服、成人儀式、
モトゾリチアゲテ
加冠スル武家時代
テハ烏帽子チカア
ツタ、カアセル人
チ「烏帽子親」ト云
フ。
○吉野殿
後村上天皇。
○年比の主君。
親代々仕ヘテ來タ
主君。
○何心もなく云々
無心ニシテ云々
○御いたはしくて云
々氣ノ毒テタマラ
ナクテ、
○おぼつかなくて心
ニカイル、心配ニ
思フ。
○障子平安時代テハ
襖ノ事コノ障子ト
同シ。
○いかでさばあらん

かたなくて、いかなる寺へもいり侍りて僧法師にもなり、父のあと
を弔ひ候はんがために、さすらへ侍り」といひけるを、あはれとき
ゝて、まづわがかたにともなひて、さまざまいたはりて後に、正儀に
ありつる事をかたりて、をさなくは候へど、心のさかしくして「
など申すに、あはれがり給ひて、めしよせ給へり。もとよりなさけ
ある人なりければ、熊王も思ひつきて、おやのあだをもわすれける
にや、よく宮仕へにけり。十五程になりければ、河内の國にて、す
こしなる所をしらさんといひけれども、恥ある一矢をもいさぶらひ
てこそ」とて、辭しにけり。

「恥ある一矢をもいさぶらひてこそ」恥ヲ知ル心ガアレバ人ヨリモ劣ラヌ一カドノ功
ヲ立テ、コソ領地モ載キマサセウツノ意。

あくる年の春、父が七めぐりにあたりけるに思ひつきて、こよひ正
儀を討つて、父の手向にもし、光範の心をもやすめ奉らんとおもひ

たちでありけるに、その日お前にめしで、「けふは吉日にてあるなれ
ば、元服せよかし」とて、和泉寺にもどりとりあげさせて、
和泉小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より給はせけるよろひを賜ひけ
れば、なみだを袖にかけてよろこぶ。夜に入るまで正儀のお前に在
りけるが、又ふとおもひ出で、討ち奉らんならば、こよひこそとお
もひて、ひざをおし直して、正儀にめをかくれば、年比頃の情深かり
しこと、けふの元服の事などおもひつづけて、いかで情なく討ち奉ら
んとおもひかへして、こころをしづむれば、父の敵といひ、譜代の
主君のあだといひ、一かたならねばと、おもひさだめけれども、何
心なくわたらせ給ふありさまを見れば、御いたはしくて、たへか
ねけるにや、廣縁に出でて、聲をあげてなきさけぶを、人々も正のり
もおぼつかなくおもひ給ふて、障子をひらき見たまへるに、ふしし

ドウシテソノナコ
 トチシテヨイモノ
 ガ。○はたらかせれば
 自由ニサセナイカ
 ラ。○形をかへ
 髪ヲ剃リオトスル
 即チ出家入道スル
 一○往生院
 河内中河内郡池島
 村ニ在ル岩瀧山ミ
 行ス。○行ひて
 一心ニ修業シテ。

○將軍の宮
 親王ノ御子隆
 良親王。○左衛門尉康方
 坂戸大夫尉藤
 ○あたらしことこ
 ゴザイマス。○ま
 料理ニナサレマシ
 タラヨロシイデセ
 ウ。○あ、こをよかるべ
 けれ。○アミデトツ
 タライ。○ありしまゝに云々
 モトノ通りカアツ
 テ井ノノチ。○ふ
 みはづすが云々
 ワダトフミハヅス
 ヤウニシテ。○さ
 さればこそ。○云
 ハンコツチャナ
 イ。○大變ダ。○川
 下。○あへて見えず
 打消シナツヨメ
 副詞。○かひなし

四四
 づめるさまの、たゞには見えすありければ「いかにや」と、とはせ給
 ひければ、ありつる心のうちを申して、「どにかくに君のため父のた
 めに、みづから死なんより外は候はず」とて、刀をとりなほせば、
 ありつる人ども、みな涕にくれてありながら、「いかでさはあらん」
 と、とりつきてはたらかせねば、その刀にてもどとりおしきり、往
 生院にて形をかへ、君より給はせる名なればとて正寛法師とぞいひ
 ける。寺の傍に、草の庵をむすびて、もしも心のかはることのあり
 もやせんとて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光
 範より給はせける刀は、ありし有様をくはしく書きそへて、かへし
 けるとかや。いともあはれなりける事にこそ。

康方水練ノ事

將軍の宮、若き殿上人あまたともなはせたまひて、よしの川にて鵜
 をつかはせて御覽ありけるに、左衛門尉康方がわかかりける時に、鵜
 の鮎を喰ふを見て、「あたらしことこそ。鳥の喰ふ鮎をとりて、まさ
 事。にせさせ給へかし。あみこそよかるべけれ」といひけるに、み
 な人をかしがらせ給ひて、「汝あみさばきならんや」と、のたまはず
 に、「いとよくさばきなん」といひて、あみをもちていづるに、衣皆
 ぬぎすて、烏帽子はありしまゝにありけるを、緒をつよくしめ、
 船にのらんとするに、「たゞおきたれ。いとあやしう」と、制せさせ
 給へども、「何かは」とて、あみをうちいれられども、魚ひとつもな
 かりければ、人々笑ふに、又あみを入れむとして、ふみはずすが如
 くにして、つぶくと水のそこに沈みけるを、「さればこそ」とて、
 人々さわぎて、水に馴れたるものどもを、川下にいれて求めさすれ

甲斐ガナクドウシ
テモナカツタ。

ごも、あへてみえず。暮れなばかがり火にて、鶺鴒を使ばせてむ、螢のおもしろからしなど、おもひ給へる興もつきて、せめてはなきがらをだにと、岩根々々を隈なく見せさせ給へごも、かひなし。

「汝あみさばきなんや」さばくトハカタマツテキルノヲヒロゲルコト。即チ綱ヲウツコ

トガ出来ルカノ意。

「たゝおきたれ云々」ヤメヨ〜ソソナアアナカシイコトデハ駄目ダノ意。

○したしきもの
○身ノ親類ヲ指ス。
○一時：二時間。
○さめえじと思ひ侍
○ツカマヘルコトガ
○出来マイト思ツテ
○こゝもさには侍ら
○はでコノ邊ニハ魚
○ガの井ナクテ…
○ヒル子云々
○エビス様ノ様ナ…
○宮の瀧
○吉野川ノ上デア
○ついで居る。ついで
○ついで音便、シヤ
○ガンド井ルノ意。

したしきがもとへ人をはしらせなごし給ひ、一時がほごも過ぎにければ、人々はかへり給はむといひあひ給へるに、すこし川上のかたに、烏帽子ばかり水の上に見えけるを、「あれ〜」といふがうちに、かほばかりさし出して打笑ふを、いかにと、いはれて、まさなごにせさせ給はむほどのものは、あみにてはとめえじと思ひ侍ひて、水そこをもとめ侍りしに、こゝもとにはさぶらはで、宮の瀧あたりまでゆきてこそ。おもふほどにはさぶらひ給はねぞ」といひて、

○ひる子
○俗ニ夷三郎トイフ
○惠比須大黒ト稱セ
○ラレテ井ル。諾冊
○神ノ子トモ事代主
○第一ノ伊弉諾尊ノ
○フ。第一ノ伊弉尊ノ
○ツトメテウヘノ云
○々々
○翌朝早ク天皇ノ所
○へ。近きほどに云々
○現場ニ行カレテ。

うきあがるを見れば、三尺ばかりなるすゞきといふ魚と、二尺餘の鯉とを左右のわきにはさみて、ひる子のさまして岩の上についで居けるに、人々おどろきて、宮にもなきものとおもひなして、あわてさわぎつるさまなど、かたり給ひて興に入り給ひぬ。其の夜鶺鴒をつかはせ、螢をとりなごせさせ給ひて、つとめてうへのお前にありつるすゝきを奉りて、康方がことを奏し給ひければ、興ある事にこそ。ちかきほどにみゆきありて御覽せさせ給はん」と、のたまはせ給ひけりとかや。

康方下女ノ事

此の康方の父大夫尉康藤がもとに下仕しける女ありけり。おなじく侍ひける藤六といひける雑色と、心をかよはし侍りけり。彼の女

○大夫尉康藤、左衛
○坂戸康卿男、
○門尉。下仕する

○下女奉公スル。○雑色足輕ノ下。○藏人所ノ下。○後世ノ足輕ノ意トシテ用ヒルコトガアル。○かよはず。○私通スル。○病氣ヲ指ス。○心もとな。○不安。○かひがひしくあつ。○かひがひしくあつ。○マメヤカニ、ネン。○枕ガニ世話スル。○枕ガニモト。○いらへ返事。○こゝろえす。○合點ガ行カナイコト。○心打こたり。○油断チシテ。

いたくいたはりけることの侍りしかば、藤六が居ける山陰の屋にこ
 させて有りけるに、京にありける女の、母の夕ぐれの程に、「かゝるこ
 とのありとき、いと心もとなおもひて、とりあへずきにけり」
 といふに、女もいとうれしげに、昔の物がたりなごしけり。此の母
 いとかひがひしくあつかふを、男いとうれしきことにおもひて、こ
 のほどのつかれに、心おこたりて、ねぶりあけるに、此の女の聲し
 てさけぶに、打おごろかれて、「何ゆゑにか」といへど、又女はいら
 へもせずふしるけるに、夢にやありつらんとおもひて、ともし火の
 かげより見るに、母は枕がみに居て泣き居けるを、こゝろ得ず思ひ
 つゝ又しばしねむりけるほどに、此のたびはいたくさけびて、屋の
 うへのかたに聞えけるに、そのまゝおきいでけれども、ともし火も
 消えに失せにければ走り出で、聞くに、屋の上より山のかたにさけ

てひゆく。

「いたくいたはり云々」所勢ハ病氣、大病デアツタコトガアツタモノダカラ。
 「山陰の屋」吉野ニアリ、藤六ガ居タ所デアアル。

○おぼす。○出テ來ル。○松ぞも。○タイマツナド。○しるべ。○タヨリトシテ。○青根ガ峰。○踵メケノ塔ノ南ニ。○アル高根チ言フ。○心得られぬ。○コトコソワケ。○ノワカラシコトデ。○ゴザイマス。○京。○みまかりにける云々。○死ンダト云フコト。○デアル。○なほこゝろえられぬ云々。○ドウ考ヘテモヤツ。○バリ合點ノ行カヌ

あわて、よばはるほどに、康藤も「なに事にか」とておぼす。外の人
 もききつけてあまた入りきて、松ぞもともして尋ぬるに、うしろの
 山に、聲につきて行けば、下なる谷に聲すなり。谷にゆけば、かし
 こにきこえ、かしこにゆけば、こゝにきこえ、手をわけてさけぶ聲
 をするべにおひゆけば、夜の明け行くにしたがひて、聲もかすかに
 なりて、ほのくゝと明けにければ、おひとごまりにけり。わかちお
 ひける人々の、青根が峯のかたへ行きしものもあり。宮の瀧、六田
 の淀、朝の原などまで、聲につきて行きしこそ心得られぬ。ありつ
 るねやにかへりて見れば、女はそのまゝふしてあり。母は見えずな

コトデアル。

- 今上天皇。後村上天皇。御位につかせ給ひし初つた。興國元年八月即位。大納言左馬介明延。又次郎宗氏男。明延元三年伊豫守護ニナツタ。
- 鷹。鷹の一種、敏鷹ノ義。小鳥ナドヲ捕フ。逸物ス。グダレモノ。
- 所さめざりければ。ドコニ井ルカ分ラヌカラ。ニ雉子に合はず、鷹ニ雉子ヲトラスコト。

りにけり。そののち便につけて母のことを聞き侍るに、その日のくれのほどに、京にてみまかりにけりとかや。なほこゝろえられぬことにくそ侍れ。

鷹怪鳥ヲトル事

今上御位につかせ給ひし初つた、伊豫國大館左馬介氏明のもごより、世にためしなきほどの逸物なりとて、はい鷹一もと奉られしを、大納言隆資卿にあづけさせ給ひて、をりく御覽せさせ給ひけるに誠に勝れたりけり。其の頃皇居のうへなる山のしげみより、夜な／＼出で、からすの聲に似て、内裏にひゞきわたりてなくを、あやしき鳥にてあらんと、武士に仰せて射させ給ひけれども、所さだめざりければ、かれもこれもかなはでやみにけり。或時かの鷹を麓の野にて雉子に合せ給ひけるに、雉子には目もかけで、山のかたそれ

- ト。カシコウ。大切ニ。
- まもる。目守ルデザツト見テ居ルコト。
- 音もせざりけり。鳴キモシナカツタ。
- 正にありける。今モチヤントアツタ。

行くを、さしもかしこうおぼしめす御鷹を」とて、行くかたにむらがりゆくに、しげみのうちに入りけるを、いかにせんとて、まもり居りけるほどに、つるの大ききなるくろき鳥をひ出して、空にくみあひ、ともにおちけるを、人々よりて怪鳥をころしてけり。かたちはからすのごとくにて、左右のつばさをひきのばして見れば、七尺あまりありけり。鷹も胸のほどを喰はれて、しばしのほどありて死にけり。夜なく鳴きつるは、この鳥にてや有りけん。其の後は音もせざりけり。いづれにたゞごとにてはあらじとて、ふたつの鳥を塚にこめて、その上にもひさき社をたて、鳥塚といひて正にありける。いとあやしきことにこそありつれ。

異果ヲ食ヒテ死スルコト

おなじ比、先帝の御廟のうしろのかたに異木のおひ出でけるを、誰

○異木。不思議ナ木。

○ちしほの紅
 ちしほトハ千入
 デヨクソメタ紅
 ノコト
 ○ふるき山人云々
 其ノ土地即吉野山
 ノ古老ヲヨンデ
 ○典藥頭
 宮中ニアル藥ヲ司
 ル役所ノ長官
 ○こゝちそこない
 氣分ガ悪ルクナツ
 テ

○源康村
 坂戸左衛門康
 國男左衛門尉

もしらで過ぎにしが、その年三尺あまりにのびけるまゝに、人見つけにけるに、いかなる木もしらす。木の皮はさくらにひとしく、葉はかつらのやうにて、それよりはいと大きなり。またのどしの春きさらぎのころに、花の咲けるを見れば、つばきのなりして開けたるが、五寸ばかりもあるらん。色はちしほの紅もすよびがたきほどになん有りける。しほみちりて、秋の半に實のなりけるが、いと大きな柿のなりして、初より花のいろのごとくにあかりけり。ふるき山人あまためし出されて、尋ねさせれども、しれるものなし。典藥頭も古きふみにも見え侍らずと奏し奉れば、「かくあやしきものは、さてありなむ」とて、まはりをきびしくかこはせて、人をつけてまもらせ給ひけるに、源康村が下づかへのわらはが、よるひそかに此の實をぬすみとりてくらひけるに、あぢはひのかうばしきこと

は、ものになぞらふべくもあらずといひけるが、かしらよりあしの先まで、ただ赤くなりぬることゝたどふべくもあらず。こゝちそこなひ、二三日して死ににけり。その木もしはすばかりのゆきにあひてかれにけり。いとあやしきことにこそあれ。

「かくあやしきものは云々」コンナアヤシイモノハツノマヽニシテ手ヲツケナイテオコウ……。

兼好法師御來談ノコト

おなじ頃、兼好法師が玉津島にまうで給へるとて、たづねおはせしに、いにしへ深く契りける中なりければ、いどうれしくて、むかしいまのものがたりしけるに、「古法皇の和歌の道にふかくあぼしいらせ、御なさけの淺からせ給はで、かしこき御影とならせ給ひし、かなしさのまゝに、其にながらふべき心地もあらざりけらし。せめて

○玉津島
 紀伊國海草郡和歌
 村ノ南方。和歌ノ神
 ナ祀ル。和歌ノ神
 ト稱ス。
 ○たづねぬる
 コレハ作者ガタズ
 ネタノデアアル。
 ○古法皇後宇多
 法皇ノマテアル。
 ○御なさけ淺からせ
 給はで……

自分ニ對スル御寵
愛モ淺クアリマセ
ンデシタガ。
○かしこき御影
御崩御ニナルヲ。
○あらざりけらし
ナカツタヤウテゴ
ザイマシタ。
○おもひかへし
考チヒルガヘシテ。
○柴のとぼそ
アバラヤ。
○心はうき雲の云々
落付イタ氣ガナイ
ノ意。
○はつなき夢路
一寸ノ事ノ夢ヲ見
テモ天子ヲ助ケテ
天業ヲ完フシヤウ
ト思フヲモアリマ
シタ。
○思ひさぢむれば
思ヒトメヤウトシ
テハ……。
○さすらひ(流浪)
旅行ノコト。
○たすまひ
様子。
○ごまる
一生暮サウトノ

のや。か。た。な。さ。に。御後の世をもとおもひ給ふるまゝに、かゝる姿
となり侍れども、露の命のきえがたくて、かゝらん世をまのあたり
に見侍ることよ」と、袖をしぼられるに、「我も先帝の御情のわす
れがたくて御跡をもしたはまほしくおもひ給ふれども、さすがにお
もひかへし侍りて、柴の戸ぼそには侍れども、心はうき雲の風にた
ゞよふらんさまして、はかなき夢路には、ふるさとの空にもかよひ、
思ひどぢむれば、西の御空にもあこがれ、春の朝には、よしのゝ花の
梢にやどり、秋の夕べの哀をおもひつづけては、さやけき月の影をも
くもらせ、もろくも落つる木の葉を見ては、はかなき世をおもひめぐ
らす袖の時雨となりて、そめにし墨の衣もむなしく、旅行く人をお
もひ送りては、まだ見ぬみねをもこゆるにこそ。いかなる縁にふれ
侍りて、人のたえなん山深きいはほのほらにも、をさまらでこそ。

意。

○おもひたつ云々
家集ニハ「世チノ
ガレテキソザトイ
フ所チ過シニ」ト
アリテ、
五句「袖ノ色カナ」
トシタリ。誤リナ
ル事決シ。

なげきて過し侍りぬれ」といへば、誠に「さには候へども、我一と
せ、木曾の御さかのあたりにさすらひ侍りし時、山のたたすまひ、
川のきよきながれに、こゝろとまり侍りしかば、ここにぞおもひと
ゞまりぬべき所にこそ侍れとて、

おもひたつ木曾のあさぎぬ淺くのみ

そめでやむへき袖の色かは

「せめてのやるかたなさに云々」切ナル悲情ヲハラシヤウモナイマ、ニ天皇ノ菩提ヲ
ト思フニツケテ出家シタケレドモイツマテモ死ヌ事モ出来ナイデ……。
「はかなき世をおもひめぐらす云々」コノ無常ナ世ナ色々ト考ヘテ袖ニ涙シテ折角 家
チシタ甲斐モナク旅行ク人ヲ見送ツテハマダ見ヌ峯ヲモ越エテ京都ナ
ドヲ思ヒ起スコトガアル。
「いかなる縁にもふれて云々」イカナル因縁ニフレテカ人ノ行キ來モ絶ヘソウナコンナ
山深イ岩ノ洞ニオサマツテ出家スルコトガドウシテ出来ナイノカト。
常ニ嘆イテ過シタコトデアリマスライ。
「おもひたつ云々」思ひ立つハ裁つテ衣ノ縁語、木曾ノ山中ノ景色ヲ見ヤウト思ヒ立ツ

テ來テ見ルト果シテ閑靜テ誠ニヨイ境界テアルカラ唯單ニ一寸一通見
タダケテ通ツテハツマナナイ。ホントウニ長クコヽニ止マツテ常ニ之
ヲ賞シヤウトノ心持ヲ意味シテ非ル。

と詠じて庵を引結びて、しばし侍らひしに、國のかみの鷹狩に、
人あまたぐし給ひて、山ふかき庵のほどりまでいまして、かりし給
ふさまの淺ましく、たへがたかりければ

こゝもまたうき世なりけりよそながら

おもひしまゝの山ざともがな

とながめすてゝ出ではべりき。それよりいづかたへこゝろとむべく
もあらずとおもひとりて、ふるさどに立ち歸りて侍れば、世の中の
みだれけるほどに、たゞ和歌をともなひとして、心をすまし侍らんよ
りほかはあらしと、おもひ侍るにこそ」このたまはせしに、誠に世
をそむくこゝろは、ひとしくこそありけれと、そゞろに袖をしぼり

○こゝもまた云々
同シク家集ニハ
「心ニモアラヌヤ
ナルコトノミアレ
バ」トアリテ初句
「スメバマタ」トシ
ケル。
○國のかみ
國司ヲ云フ。
○山ふかき庵
山ふかき庵
兼行ノ居ル庵。
○ともなひ

侍りき。

○友達ノ意
念ひこりて
思ヒキツテ断念シ
テ。
○心をすます
心ヲオチツケル。

「こゝもまた云々」コノ土地ハ山深ク水ハ清クテ浮世ノ事モ聞ヘナイヨイ所ダト來テ住
居シテ見ルトコヽモヤハリ淺マシイ浮世デアリマシタ。アヽナントカ
シテ自分ガ世ヲ遣レタコウシタ身ヲ住マハスヨイ場所モアレバヨイニ
ナリ。ソシタラ自分ハ行ツテ住ムモノナトノ意。

公行朝臣閑居ノ事

長月のころ、よし野を出で、ならの都のゆかしく侍りて、こゝ
かしこみありき侍るに、大安寺といへる所に、公行朝臣の世をいどひ
いますなるを思ひ出で、たづね侍りしに、ひまあらはなる柴の戸
の、しばしがほども住むべくもあらぬいたるの水は、木の葉にうづ
もれて、わざとならぬ庭の草むらの色は、さながら霜にけたれぬ
にや、風もたまりぬべくもあらぬしやうじを引きたて、いますに

○大安寺
大和辰の市の北和
銅三年建立。
○公行朝臣
洞院左大臣實世男
母は權大納言實教
卿の女。
○正平二年七月二十
七日出家入道シタ
ル。
○ゆかしく侍りて
行キタイ心持カス
ル訪レタク思ツテ
○ひまあらはなる柴

○うちおかせ給はで
下へモオカナイ
○こゝろにこむ
一生懸命ニナル。
○ひな
片田舎。
○うしろめたき事
後暗イコト。
○三君、中君、三ツ
大君。
○公泰公
冷泉大納言正二位後
權大納言正二位後
ニ右大臣ニナル。

六〇

なき名さへはやくながるよしの川

岩打つ浪のいはでやみなむ

とありけるを、うちもあかせ給はでながめさせ給ひけるに、御父の卿のふどいらせ給ひければ、あどろき給うて、おきわすれさせけるを見給うて、「ためしなきことにあらねども、かくみだれたる世にすれば、君さへひなの御住居にわたらせ給ひて、やすき御心もおはすべきかは。まして下としては御敵をほろぼしなむはかりごとを、心にこめてこそ誠の道ならめ。それさへあるに、御うしろめたき事にこそ。おもひとまらせ給へ。公泰公の三の君をこそむかへさせたまはむすれ」と、いさめさせ給ひけるを、いといたうはづかしげにおぼし入らせ給ひし御けしきなりしが、その夜よし野をしのび出でさせ給ひて、御行方のしばししれざりけるが、程へて大安寺にいます

よしのきこえければ、大臣殿よりさまさま仰せられけれども、ころつよく世をのがれさせ給ひけりとかや。

「よしの川云々」「よしの川岩うつなみ」はいはでノ序詞、玉ちるハ波ノ縁語、

心中切ニ思ツテ井マスガ道ナラヌコト故言ハナイテ空シツ泪ノ流レル
コノ袖チアナタニ見セタイモノデアル。(ソシタラ心中ヲ察シテ下サル
デセウ。)

「なき名さへ云々」「はやくながる、」波ノ縁語

無實ノコトデサヘモ早ク世ニ傳ハルコトガアリマス。ドウカソソナコ
トチオツシヤラナイテ下サイ。

實勝朝臣北方ノ事

洞院の實世公の御女は、御心ばへよりはじめて、御かたちのいどめでたくおはしましければ、みかどに奉らんとかしづかせ給ひけるを、宰相中將實勝朝臣のせちによばひわたらせけれども、ゆるし給はねば、ちからなく過し給ひしに、春の半過ぎゆく比なるべし、高

○宰相中將實勝朝臣
滋野井參議右中將
公、向卿男
○高間の山
大和葛城山ニ續イ
○よそながら云々
新古今一よそにの
み見てや止みなむ

六一

葛城や高間の山の
 嶺のしら雲
 ○みかどに奉らんさ
 かしづかす。らんさ
 天子ニシヤウトノ
 考ヘテ大切ニオ育
 テニナツタ。オ育
 ○よばひ
 ヨバフテ懸望ノ
 意。オツキノ方。

○いはしわたして
 役小角葛城山ニ修
 行シテ飛自行在ノ
 術ヲ得五色ノ雲ニ
 シタ。葛城ヨリ金
 剛ニ至ル道ガ峻シ
 イカラ岩橋ヲ渡サ
 ウトスルコト。一
 ヲ言主神容貌醜キ
 ニエ白晝事ニ從フ
 ノチイヤガツタ。

間の山のさくらを、よそながら見させ給はんとて、實世公女房達を
 ともなひ給うて、山路をたごらせ給ひ、高ねにのぼらせ給ひけるを、
 宰相中將の君、かねて君の御めのごと、御心をあはさせてしげみにか
 くれいませをしらせ給はで、めのごと、ともにながめやらせけり。げ
 にもたかまの山の名もいちじるくこそあれ。花はたゞ雲とみゆるは、
 心ありてにや」とたはぶれ給へるを、「猶かなたよりは、よくこそあら
 め、しげみを出ではなれなば、よしの川も見おろされぬべし」とい
 ひく。てこなたへさそふを、實勝朝臣つと出給ひて、「いはしわた
 して奉りなむ。こなたへ」とかいおはせ給ひて、めのごとごともにか
 へり給ひけるを、人しらざりけり。さて「姫宮こそみえさせ給はね
 と、人々さわぎて、手をわかちて、谷に落ちさせ給ひけるにやと、
 いはほのかくれ、はざまはざまをもとむれども、かひなし。かゝる

爲に遅延スルノナ
 キイテ小角大ニ怒
 ツテ一言主ヲ呪縛
 シテ谷ニ繫グトイ
 フ事元享釋書ニ見
 エテ井ル。いちじ
 うちじるくこそあ
 著シウヨイ眺メテ
 アル。いひく。て
 何所モ誘ヒ言フ
 ○義詮
 足利氏第二代ノ將
 軍。君は八幡へ皇居を
 うつされしに。義
 詮伴ツテ和睦ヲ
 乞ヒ。正平七年閏
 二月十九日八幡へ
 還幸サレタ。○は
 ざま。岩ノ間。狭イ間。
 ○た。おはしませ。
 ソノマ。穩便ニシ
 テ置キナサイ。

おく山には、天狗などいふもの、つねにすむなれば、とり奉りやし
 けんとして、谷嶺を越えてあされども、いませねば、なくく歸り給
 ひぬ。日を経て宰相中將のもとに、お給へりどつぐる人のありけれ
 ば、いきまさ給ひて、「みかどにうたへて、つみせん」とのたまはせ
 けれども、かゝるみだれのうちには、たゞおはしませとせいする人
 々のおほかりければ、こゝろにあらでやみ給ひけり。いく程もなく
 て、將軍義詮公のもとより、奏し給うて、都へ還幸をすゝめ奉れば、
 君は八幡へ皇居をうつされしに、實勝朝臣も、「都しづまらば御むか
 へにまわりてむ」と契り給ひて、御ともに參らむと立ち出でさせ給
 ふ御袖をひかへ給うて、

何となく心にかゝる白露の
 おき別れゆく袖のけしきは

なごさはおぼすにかとて、

別路の露にはあらぬうれしさを

やがて袂につゝみこそせめ

といびなぐさめでゝこゝろづよく立ち出で給ひけり。

「いはばしわたして奉りなん、こなたへ。」ツレテ行ツテアゲマセウコチラハオ出デナサ

イ。道ヲツケテアゲヤウノ意。

「何さなく云々」御出發ニツイテ別レテ行クアナタノ袖ノ様子ヲ見ルト何ダカ別レルコ

トガ氣ニカゝツテ心配デ仕方カナイ。白露ハおきノ序おさハ別レ行く

ニカゝル。

「別路ノ露には云々」泪デハナイ所ノウレシサト云フモノナ間モナク袖ニツム様ニナ

ルデセウ。「別路の露」泪ノコト。

かくて歳の半ほど、御心を雲にやごして、まらわびさせ給ひしか

ひもなく、八幡にて討たれさせ給へりと聞かせ給ひしより、「されば

よ、その別路の、何とやらん心にかゝりておぼえしが、かゝらむ事

○歳の半ほど

○御心を雲にやどす

○都ノ方ニ心ヲ宿シ

○心ヲ宿シテ何レモ

○討たれさせ給ふ。

○ナクナラレルノ意

○さればよ

○その別路の

○ツノ當時ノ別路

○かゝらむ事にこそ

○ツタノダ

○ちぎりはじめし折

○ツウ云フ間柄ニナ

○ツタ當時ハ

○我心をあはせて云

○自分モ心ヲ合ハセ

○コトヲシタ。言フ

○ニ言ヘナイ辛抱モ

○シタ。

○うさからぬかぎり

○一族中。

○おもひおさる

○軽蔑サレル。

○かゝる事云々

○ト。カヤウナ不幸ナコ

○ソウユウ不幸ナ境

○アルモ世間ニハ例ノ

○アルコトデアアル。

にこそ。今はながらふべくもおぼえぬなり。ちぎりはじめしその折からは、我心をあはせて、あらぬぬわざをしたまへると、うとからぬかぎりにはおもひおとされ、たのむべき人はむなしくなりければ、おもひさだめにけり」と、かきくどかせ給ひければ、めのこの侍従、「さあぼしたまへりともかひも候はじ。かゝる事もためしなきにはあらず」など、いさめて、まことにはおもひたち給はじと、すこしおこたりけるひまに、うかれ出でさせ給へるが、夕ぐれのはごなりければ、さらでも道のおぼつかなきに、川音のかすかなるかたをしるべにて、なつみの河のほとりに、たどりつかせ給へれども、月さへうとき山陰のほたるをよすがにたのみ給ひて、岩のおもてにさだかならねど、

山陰のくらきやみ路にまよひなむ

なつみの川に身をしづめなは

「山陰の云々」今此ノ山陰ノ山路ハイト暗イガコノ山陰ノ暗イ山路ニ迷ツテドウセナガ
クウカプト云フコトハアルマイ。カヤウナ嘆キニ沈ンデコノ夏見川ニ
身ヲ投ゲテ死スルニ於イテハノ意。

と書きつけ給うて、御身をしづめたまひけるに、御跡をたづねも
とめけるものゝ、あまたつごひて、松どもともして見けるに、あへ
なき御かたちの、岩のはざまにかゝらせ給へるを、とりあげ奉るに、
はつかに御いきのかよはせ給ひけれども、御顔の色もかはらせたま
へるに、皆涕おとしてさまゝにとりあつかひたてまつれば、やう
く御心のつかせ給へるにや、御目の少しひらけりければ、皆喜びて
かへりけり。御心ちのつかせ給へるまゝに、御なげきをおぼしいで
させ給ひて、せめては御さまをかへ給はむと、しきりに給へば、せ

○おこたる
油断チスル
○月さへうごき。
月サヘモサナ
イ
○よすが、タノミ
シルベ、タノミ

○あへなき御かたち
ナサケナイ御スガ
タ
○とりあつかひする
介抱スル
○御心のつかせ給ふ
正氣ノツクコト
○かすそひにけり。
イロくアリマシ
タ

んかたなくて、御心にまかせ奉りてけり。あさましくみだれぬる世
の中には、かゝる事さへかすそひにけりと、いとかなしくこそ。

行輔卿ノ妾ノ事

平三位行輔卿のしのびていひかはしたまへる女の、京にすみける

が、秋の半の比いひおこせける、

思ひかねそなたの空をながむれば

我にたぐへる初雁の聲

御返し

わが袖を猶しほれどや初雁の

つばさにかけてし露の玉づさ

○行輔卿
鳥丸平城輔ノ男ト
云フモ傳詳アナ
イ。

○たぐへる
並ビ副フノ意。

○我にたぐへるハ
自分ガソナタノ御
空ヲ慕フソノ思ヒ
ニ……。

鼻高キ狂歌ノ事

○内大臣實守公ハ冷泉左大臣實守公ノ四男加茂實守公アル
○節會の内辨アル訓元曰ノ式ニアル節會ニハ内辨ト稱シ諸公事ニハ上ト稱ト稱スル名テアル
○つくるふ「繕」作ルノ修復ス整へ粧フノ意

内大臣實守公の節會の内辨をつとめさせ給はんとて、威儀正しくしつろはせ給ひて、参り給ふ道にて、紀の國よりはじめて参りける武士どもの、行きあひ奉りて、あなおそろし、山伏とも見えす、まして人にはあらし、天狗のたぐひにあるらん」といひけるを、きかせ給ひて、
天狗ともいはいはなむいはずとて
はなたかゝらぬ我身ならねば
きはめて御鼻の高くわたらせたまひけるを、「いひあひにけり」と、のちにをかしながらせ給へり。

松茸歌ノ事

○それむ法師傳テナイ
○關伽棚ノ水ノ梵語
○關伽棚ノ主トシテ佛語
○外ノ花ナドノ供物ヲモ言フ。御町
○云フコトモアル。ト
○關伽棚ハイロクノ供物、花、水、皿ナドヲノセテ置ク

高野山より、そねむ法師のたづねいまして、關伽棚にありける松茸を見給ひて、
いつかはとそのあかつきを松たけの
ひらくるのりにあはんどぞおもふ
どの給はせしほごに、
松たけのひらくる法にあふことも
そのあかつきのあめのうるほひ

犬王丸山賊ニアフ事

○隆俊卿四條隆資男

隆俊卿のもとに、めしつかひ給ひし犬王丸、山だちにあひて、矢

内大臣從一位權大納言テアル山だち山賊ノ事。

にあたりなむとしけれども、やう／＼にげのびて」といきもつきあへず、かたりけるを、このきかせ給ひて

梓弓引きてしたへる山だちは

犬追物といふにかあるらむ

とてをかしがらせ給ひけり。

楠墓落書ノ事

楠正行の墓處に、いかなるものゝしわざにやありけむ、書きつけける。

くすの木のあとのしるしを來て見れば

まことに石と成りにけるかな

「くすのき云々」コレハ諺ニ楠木ハヨク石ニ化スルト云フカラカヤウニヨンダノデアラウ。

康村長重狂歌ノ事

瀧口長重が武藏守師直皇居をおそひなんとしける時、いちはやく落ち行きけるをしらで、跡にて尋ねられけれども、見えざりければ、源康村

みよし野にありときゝこし瀧口が

おちては名をもながしけるかな。

といひけるをつたへきゝて、やすからずおもひ、いかにもして、此のかへしをせんとくかゝひけるに、よしの川の水上のほとりのさかひを、山人のあらそひてうたへけるを、康村に仰せられてさかひを見に行きてかへりなんとするに、年老いにければ、しばらく打やすみ／＼しける程に、うたへ人ははやく参りて、けいだん所に待ちあひ

○正平十三年正月高師直吉野ノ皇居ヲ襲ヒ奉ツタ事ハ上ニ言ツテ井ル。○ながしけるハ長重ニカイル。○けいたん所檢断所テ色々ノ事柄ヲシラベ断ズル。○やすむらんノヤスル。○むらハ康村ニカイル。

るほどに、大理のやすむらを尋ねさせけれども、いまだかへり給はずといふ。はるかにまたせて後にかへり来て、しか／＼なんといひけるを

よしの川其のみなもとをたゞすみの

老いにけりとてなどやすむらん

といひしぞ。いとをかしかりし。

右馬允行繼遁世ノ事

○二條關白殿ハ藤原師基ナリ。大政大臣兼基男吉野テ右大臣從一位、正平六年關白トナツタ。御勘氣。勘當ニ同シ。○むつたの里ハ六田地名デアアル。

二條關白殿にありける右馬允行繼といひけるは、去ぬる八幡の戦にいかなることかありけむ。かへらせ給ひて、御勘氣有りければ、をさなき子ひとりと、女房とをむつたの里に、したしきものゝ有りけるにあづけて、高野の山にのぼりてかみおろしけり。三年ばかり

○わか庵ハ松翁ノ庵ノコト。○ほだし。テアシマトヒ、眷屬。○けいする。啓スルテ申シヒラキスル奏スルナドノ意。○むらなき。スベテ圓満ニ發達シタ、タケヒノナイノ意。

ありてわが庵に來りて、あめしづくとなきけるを、「いかに」ととへども、いらへもせで、心のゆくかぎりなきで、起きなほりいひけるは、「諸國修業の心ざし侍りて、高野を出で侍りしに、さすがに過しがたくて、六田のあたりを、よそながらも見なましとおもひて、そのほとりをさすらひ侍りしに、あたらしき塚の前に、十あまりなるわらはの、ふししづみてなげき居りけるを、あはれなるさまの見過しがたくて、「いかに」ととひ侍りければ「父は三とせばかりさきに世をのがれて、いづちともなく出で給ひ、御おとづれも候はぬを、母君のあけくれなげき給ひしあまりに、御心みだれて、すぎつる夕ぐれの程にまぎれ出でさせ給ひて、河よどのほとりに、身をしづめ給ひしを、人々のなきがらを尋ねて、このつかにこめさせ給ひて候らへども、したしかりつるもうとくて、御跡もとふべきたよりもなく

候へば、一かたならぬかなしさに、かくて候ふなり。

「御經をよみて給ひてん」といひし俤の、みしこゝちしければ、あまりかなしくおぼえて、いかにめぐり來にけむと、くやしきまでにおもひ候ひながら、こゝろづよく經をもよみ、念佛手向けて、草の陰にはいかゞおもふらんと、おしはかるにも、涙にむせび、のこしおきけるわらはのさまを見るにもたへがたく、めもたげられ候はざりし。

やがて日もくれにければ、「いざわがやどへ」と、いざなひ候ひしほどに、行方のこゝろもとなく侍りて、ゆきさふらひしに、すむべくもあらぬ程にあれはてて、むかしさふらひしつかへ人も、いかになりぬるにや、「たゞひとりのみすむなる。したしき人はおはせぬにや」ととへば、「まづしくなり行くまゝにとは侍り。むかしつかひ

し女の、このあたりにのこりて、朝夕のいとなみをして、あたへぬるばかりにてこそ候へ」と夜もすがらかたりけるは、皆我身の上のことなりけり。夜もあけなんとしければ、かの女のきたりなば、見わすれぬ事もやあらましと思ひて、「はか所にて經をよみてん、かへりこん程に立寄りなん」といひて、たち別れ侍る。この心のうちをおしはかり給へかし」とかたるに、ともに袖をぬらし侍りて「げにもかゝるほだしは候はじ。行へしられず出で給ふとも、玉の緒の絶え給はぬ程は、わすれ給はじ、後の世をさまたぐるにぞあらん。ぐし給へ、とのへ奉りてむ。こゝろやすく、後世ねがひおはせよかし」といひければ、いどうれしげにてかへりけり。何とかがたばかりけむ、やがてぐして來りけるを、ありつることを申してともなひつれば、いと不便におぼして、御身ちかうめしつかはれて、この比は右馬允

行朝と名のりて、むらなき剛の者にてありけり。

中納言局ノ歌ノ事

○みづのえのたつの
 正平七年ノコト。
 ○舊都の主上崇光院
 ○北朝ノ主上崇光院
 ○本院光嚴院ノコト
 ○新院光明院ノコト
 ○黒木の御所
 ○皮ヲ削ラヌ木材テ
 作ツタ御所。
 ○竹ノ小サク細ク叢
 生スルモノ、總稱。
 ○うばら茨ニ同ジ。
 ○からたち
 枸橋テ唐橋ノ略常
 キコ
 ○二枳穀ノ字チアツ
 レドモ誤ツテ井ル
 ノデアル
 ○中納言ノ局
 四條大納言隆隆卿

正平みづのえのたつの年の春、舊都の主上、本院、新院、ともに
 さらはれ人とならせ給ひて、此の山にいらせ給へるに、黒木の御所
 のあさましきに、どころく、しのにて殿めしく圍ひなして、なほそ
 のほかに、うばらからたちをひまなくうゑたるうちに、おしこめ奉
 る。誠に見るめもいどかなし。さくらより外に御なぐさめもなかり
 けるにや、中納言のつばねの、

かゝる世もよしやよしの山ざくら

やごのものどてかざしにもせん

とそうし給ひけるとき、て、世の中のはかなき事を、花にもおもひ

ノ妹デアル。

○かざシハ挿頭デアカ
 ザスモノ。古草木
 ノ花枝ヲ髪ニ刺ス
 モノ、後ニハ造花
 ナ用ヒルニ加フ
 事等ニ冠ニ加フ
 挿頭。

なごらへ侍りて

かくばかりうつればかはるみよしの、

花見てくらす身こそつらけれ

「かゝる世も云々」カヤウナ憂キツライ、ハカナイ世ニ於イテモ吉野ノ山ザクラハヨイ
 モノデアル。自分ノ宿ニハ別ニ心ヲ慰メテケレル何物モナイガ此ノ山
 ザクラガアルノデコレナカザシニモシテ心ヲ慰メヤウノ意。
 「かくばかり云々」ウツレバカハル世ノ習テ昨日ノハテヤカナ生活モ何處ヘヤラカヤウ
 ニシテミヨシ野ノ山サクラバカリヲ見テ他ニ何物チモ見聞キスルコト
 ノ出来ナイサビシイ身こそ憂ク辛イコトデアルワイ。ミヨシノノミハ
 身ニ掛ツテ井ル。

嵐山ノ事

○女院後醍醐天皇妃
 新待賢門院廉子ヲ
 指ス。
 ○さものみやつこ
 主殿寮ノ下部。
 ○山のなり山ノ形ノ
 意ナリハ「形」爲リノ
 意。爲リタル状。物
 ノ外ヨリノ見エ

彌生の比、日うらゝかなるに、女院の御所の御庭に、散りつもりけ
 る花の、いと多かりければ、さものみやつこめさせ給ひて、一とこ
 ろに集めさせ給へば、高さ五尺ばかり程の山のなりに在りけるを、

形ノ状、スガタ、
 〇いひひなく、
 言ヒテ詮ナシノ義
 ツマラナイノ意
 〇つとめて早朝ノ義
 〇辨内侍
 〇右少辨俊直朝臣ノ

いと興せさせ給ひて、よしの、花をうつし、山なればとあらし山と
 名づけさせ給ひて人々に歌よませ、上にも奏し給ひければ、あすの
 程にわたらせ給ひてんと、のたまはせ給ひけるに、その夜、風のは
 げしく吹きて、いひかひなく成りにけり。つとめて辨の内侍のかた
 へ兵衛のすけのつぼね、

みよしの、花をあつめし山の名も

けさはあらしのあとにこそあれ

とありけるを、奏し給ひければ、

千早振神よもきかず夜のほごに

山をあらしの吹きちらすとは

このたまはせて、いといたうをかしがらせ給ひけり。

「みよしの、云々」吉野ノ山ノ花チアツメテ作ツタ嵐ノ山ノ名モ今朝ハ嵐ノタメニ吹き

散ラサレタ、サミシイアトニナツテシマツタコトアゴザイマス。アラ
 シハ山ノ名ノ「嵐」トモツレアツテ井ル。
 「千早振云々」夜ノ間ニ嵐ガ花チ吹き散ラストハ神代ニ於イテモ未ダ聞カナイコトデア
 ツタライノ意、千早振ハ神ノ枕詞。

作り山伏ノ事

〇梶井二品親王、後
 伏見院皇子尊胤親
 王二品天臺座主
 母治部卿局主紹運
 院御子圓隔坊持明
 〇あさまし
 アキレハマレル程ダ
 トカレアマリト意
 ヘバアマリダノ意
 マリノ事ニ情ナア
 程ノト解スレナイ
 〇ヨイ
 殿吉野遷幸ノ事ノ

梶井二品親王とらはれさせ給ひて、この山のあさ。ま。し。げ。なる、しばの
 庵にすませ給ひけるを、山木の三郎といひけるもの、うけ給はりて、
 さびしくまもりにけり。二とせばかりありて、御邪氣のこゝちの日に
 そひて、おもらせ給へるといひの、しりて「嶺を通る山伏もがな。お
 こなひさせでん」といひあへれば、守りける武士ども打ちりて尋ね
 けるに、その明の日、尊げなる山伏を、三人具して参りければ、よ
 ろこばせ給ひて、御枕上にめして、行ひしけるに、二日ばかりありて、

條ニクハシクノツ
 テ井ル。同ツク召
 捕ハレサセ給ヒテ
 金剛山ノ麓ニソ坐
 シケル云々トア
 ル。
 ○さわやぐ「爽」淨ク
 快クナル意。
 ○御布施「布」視捨施
 僧ニ施シ與フル品
 物。
 ○律師僧官ノ第三番
 目テ僧正、僧都ト
 共ニ僧綱ト稱セ
 ラレル重イ役デア
 ル。
 ○笈ホンバコ、オヒ
 パコ。
 ○ものす、事ヲ爲ス
 ノ意。コイテハコ
 シラヘテ……意。

八〇
 御心のさわやぎけりと、御布施など給はり、守りける武士共、御歡の
 みき給はせければ、夜ふくるまでうたひなどしてあそびをりけり。
 山伏は曉に出で立ちなむとて、御暇を申して、まだくらきにかへ
 けり。ひるのほごにや、「宮のおはしまさぬ」とさわぎて、關々へ人
 を走らし、山伏をどめられども、それよりさきに通らせ給ひて、そ
 の夜興福寺までつかせ給ひけりとかや。これは御門徒の律師元祐と
 いひけるものが、かねてはかりて、おのれ山伏となりて、笈をおは
 きに宮のかくれさせ給へる程に物しけると、後にぞ聞えし。
 それより皇居をいよくかたく守りければ、さまざまはかりけれど
 も、せんかたなかりしとかや。

寛成御子鷹狩ノ事

○ひろなりの御子
 後村上天皇ノ皇子
 寛成親王即長慶天
 皇テアル。或ハ照
 成親王(後龜山天
 皇)トモ言フ。
 ○實爲中將
 藤原爲村男、後内
 大臣。
 ○忠行侍從、
 民部大輔共ニ傳記
 未詳。
 ○むつからす。
 「憤」ムツカシク思
 ヒテ憤ルノ義
 コイテハ不満足ノ
 意。
 ○そらごこ
 「虚言」イツハリゴ
 トツツバナシ。

ひろなりの御子の、いまだをさなうおはしましける時に、わか
 き殿上人あまたともなはせ給ひて、なつみの河の河よどのほとりに
 て、鷹つかはせて御覽ありけるに、かたはらにいとおほきなる岩の
 えもいはれずおもしろきに、小松の生ひ出でたるありけり。みこ御
 覽せさせて、「この岩をかへりなん時、皇居の御庭にもて參れ。うへ
 に奉らむ」と、實爲中將にのたまはせければ、をさなき御心をおし
 はかりて、御事うけさせ給ふ。鳥などあまたとらせ給ひて、かへ
 らせ給へる時に、忠行侍從に岩をわすれ給ひしと、のたまはせけれ
 ば、「民部大輔がちからもつよく侍れば、御あごよりもて參り侍ふな
 り」と啓して皇居にいらせ給ふ。

御鷹の鳥など奉らせ給うて、實爲中將に「ありつる岩を」とめさ
 せ給ひけるに、「忠行の侍從のおほせごとをうけたまはりぬ」と、け

いし給へば、侍従をめでしていかに」とたづねさせけるに、「民部大輔の御あごよりもて参らんといい侍りつる。民部をめさせ給ひなん」とのたまへば、むつがらせ給うて、「中將にこそよくいひつれ。なごさはいふにか」としほらせ給ひければ、中將のありつることを奏し給へば、をかしがらせ給ひて、「誠におもしろからむ。岩こそ見まくほしけれ。民部がちからこそゆゝしければ、もてきなんに、めさせ給へ」とのたまはするに、中將立ちたまひて、民部大輔に「かゝることなんある。いかゞしてむ」との給へば、「すべきことこそあなれ」とて、御庭にありけるちいさき岩に、松の枝をとりつけて、中將いとおもげにもちて、宮の御前にすゑたてまつれば、「ちひさくこそあれ。それにはあらし」と、なほむつがらせ給ひければ、民部大輔「さればこそ。その岩をもちて、うへの山をとほりさぶらひしに、右左より山

のさし出で、道いとせばき所にてかなひがたく、いかにせましとたゞよひ侍りしに、むかひのかたより山伏のきたりけるが、「岩にせかれてとほられぬにこそ、のけ給へ」とのゝしりける程に、「我もせんかたなさに、かくて侍る。いかにせまし」とわびあへるに、「さらばすべきことこそあれ」とて、數珠おしもみ、何やらんつぶやきていのるにしたがひて、このいはちひさくなりて、やすくどほりてさぶらひし程に、山伏も行き過ぎしをよびかへして、「もとの如くにいのりなほしてん」といひければ、「また行く先にはそき道のいますれば、いかゞし給はん」といひしほごに、げにもとおもひ侍りて、そのまゝ持ちて参りぬ」といひたまへば、うへよりはじめてありつる人々、をかしがらせ給ふに、宮の御けしきも、いとよくならせ給ひて、「げにさもあらんことなり。その山伏をめしかへせかし」とのたまはず

るに、「はやはるかにゆき過ぎて、いづちゆくらんもしらす」とけいし給へば、「ほいなきことにこそあれ。とどめて民部大輔の大きな空ごとを、すこしきやうにいのらせむものを」と、の給はせける。誠に行末たのもしき御ことにこそ、いとせめて覺え侍りしか。

大神宮託宣ノ事

○中納言顯能卿
北親房男。伊勢宮司テアツタ。
○宿世。アノ世、前建武フつちのえのうしの年
今考ツチノエノトヲノ年ノ誤デア
ル。
○ひたち常陸ノ國ノ事。
○三くさの御たから

過ぎつる年の春の末つかた、天照大神にまうて、三七日がほど、法施奉りて、かへさに中納言顯能卿の御もとへ立ちよりて、一夜がほごむかし今の御物がたりしけるに、「世の中のかくみだれぬること、人の國にはためしおほかりぬべけれども、わが國には是ぞはじめならん。いつかはしづまるべき。かゝる折ふしに生れきぬらん宿世のつたなくて」など、わびはべるに「誠にさこそおはすなれ。されども

三種ノ神器ノ事、
三くさハ三種ノ意
○正平つちのえの
いぬのとし
十三ノ年、後村上
皇ノ御代、北朝ハ
後光嚴院ノ延文三
年デアアル。

御敵はほろびて、終に還幸ならんところおもひ奉れ。今上のいまだ陸奥の太守にて、あづまへおもむかせ給はんとし給ひける時、儲の君にたゝせ給はんむねを、ひそかに申しきかせ給へり。建武つちのえのうしの年、七月の末つかた、伊勢の國に越えさせ給ひければ、とどまらせ給ふべき、御つげのわたらせ給ひけれども、かくいでたゝせ給ひぬるうへはとて、あまたの御舟よそひして、九月のはじめつかた、上總の地ちかく、御舟のつき侍りしに、いささか空のけしきのかはりてみゆるまゝに、浪風あらく侍りしかば、あまたの舟ども、伊豆の御崎にたゞよひ侍りしに、猶風のつよく吹きもてきて、船ごものちり／＼になり、おなじどころにありし船の、ひたちのかたまで、ふかれゆきしもあるに、宮の御船は、その日のくれほごに、伊勢の海までふきもどして、それより吉野にいらせ給ひしに、程なく

三くさの御たからをつたへ給ひて、天つ日嗣をうけさせ給へば、何事も大神の御はからひにこそいますかりけれ。われも宮の御舟にさぶらひて、まのあたりのことに候へば、たのもしくおもひて過し侍る」とかたり給ひしに、こたびまうで侍りしを、神もうけさせ給ふ御神託にこそあれと、おもひつゞけて、いとたのもしくかへり來にけるにこそ。

正平つちのえのいぬのとしの春、草のいほりの夜の雨に、よしのゝ花の露をしたためて、よしなし事を書きつらね侍るこそ、ものぐるほしけれ。

隠士松翁

吉野拾遺詳解 終

大正十四年九月十日印刷
大正十四年九月十五日發行

定價金六拾錢

著者 三栖暎想士

東京市小石川區原町九番地

發行者 神保長彦

埼玉縣大宮町大門町三六六九

印刷者 星澤勝平



不許複製

發行所

東京市小石川區原町九番地
振替東京二九六七五番

神保書店

296
227

終

